

現代学生気質 —アンケート調査から見るこの十年—

片 桐 新 自

The Values of College Students in the Present Day: An Analysis Based on Three Questionnaire Surveys over the Past Decade

Shinji KATAGIRI

Abstract

This paper discusses the consciousness and the values of college students today, based on the 1997 research that is the third questionnaire survey taken every five years since 1987. As a result of this research, it became clear that the following five points have changed largely: 1) There has been change in the way of thinking about relationships between men and women. 2) There has been decline in social concern and social ambition. 3) Political concern and motivation for political participation have declined. 4) Affirmative opinions on the Self-Defense Forces have increased. 5) Difference in attitude and opinion of students among colleges have reduced. It is certain that the above five points have changed, but the basic values leading to such consciousness have not changed largely. Those values are the ICCE values (Individualism, Conformism, Conservatism, Epicureanism) which I found to be the main values of Japanese young people in 1987.

Key words : college students, values, attitude survey, ICCE values (Individualism, Conformism, Conservatism, Epicureanism)

抄 録

本稿は、1987年以来5年おきに継続的に調査してきた「大学生の意識と価値観」の第3回調査を基礎とした論稿である。本稿の狙いは、この10年の間の大学生の意識と価値観の変化を明らかにすることにある。調査の結果、以下の5点が大きく変化したものとして浮き上がってきた。1) 男女関係のあり方に関する意識の変化、2) 社会関心と上昇志向の低下、3) 政治に対する関心と参加意欲の低下、4) 自衛隊に対する肯定的見方の増加、5) 大学別の意識差の縮小。しかし、確かにこうした意識は変化しているが、他方で、その根底にある「やや個人主義的でありながら、他人との協調性を大事にし、大きな社会の変化を望まず、できることなら楽しく楽に暮らしていきたい」という価値観——筆者はこれを「個同保楽主義」と名付けている——自体は、大きな変化はしていないということも明らかになった。

キーワード：大学生、価値観、意識調査、「個同保楽主義」

はじめに

本稿は、1987年から5年おきに継続的に調査してきた「大学生の意識と価値観」の第3回調査を基礎とした論稿である。第1回調査から数えると、10年の月日が経ったことになる。「十年一昔」という言葉があるが、現代のような情報社会においては、10年も経つと、「二昔」も「三昔」も経ってしまったような気がする。10年前にはほとんどまだ誰も知らなかったインターネットが今や我々の生活の中に当たり前のように入り込み、情報量は質的にも量的にも以前とは全く異なるレベルに到達している。経済的には慢性的不況にあえいでいる現在とは異なり、10年前はバブルのまっただ中にあり、土地と株はひたすら右上がりが続けていた。自民党は、中曽根内閣の下に、衆議院で300議席を擁し、今やすべてなつかしい名前となった社会党、公明党、民社党との慣れ合い的「国対政治」を続けていた。この頃、自民党以外からの総理大臣、まして社会党から総理大臣がその後10年以内に誕生するなど想像していた人は誰一人いなかっただろう。そういえば、今や一般用語のように使われている「おたく」などという言葉も10年前には大多数の人々は聞いたこともない言葉だった。

その頃若者に対してよく使われていた言葉が「新人類」だった。最近頻出している突然「キレ」て、殺人まで犯してしまう「普通の」中学生たちに比べれば、10年前の若者など十分「旧人類」だったのかもしれないが、当時の中高年からは理解のできない新しい価値観の持ち主の登場のように言われたものだった。当時比較的若い大学教員として、約一回り年下の学生たちと付き合いながら、彼らに違和感よりも共通性をより強く感じていた私は、この「新人類」と呼ばれる人々の価値観を探りたいと思うようになった。また社会的に見ても、今後の社会を担っていく若者たちの価値観を知ることが、もっとも重要な関心事項でもあり、一連の価値観調査の第1回目を行うことにしたのだった。

その調査の結果から私が語ったことは、まず若者と言っても一枚岩ではなく多様な価値観の持ち主がいること、ただあえてその多数派の姿を多少単純化して捉えるならば、「やや個人主義的でありながら、他人との協調性を大事にし、大きな社会の変化を望まず、できることなら楽しく楽に暮らしていきたいと考えている」と言えるだろう。こうした若者の価値観に、私は「個同保楽主義」というネーミングを与えた。この価値観の持ち主は、やや個人主義的で楽しく楽に生きていきたいと考えているといった点から、「会社人間」としてまじめに働いてきたことを誇りにしている中高年層から見たら、眉をしかめたくなる存在と思われがちだが、実際には若者の個人主義は徹底した「ゴーイング・マイ・ウェイ」ではなく、自分と自分にとって大切な家族や仲間のことは大事にしていくという「拡大された個人主義」——「私生活主義」と言ってもよい——であり、集団に適應できないという特性ではない。当然連動することだが、「楽しく楽に」というのも、可能ならばといった程度であり、徹底的にそれを追い求めているわけで

はない。むしろ協調性を重んじ、他者に同調していく生き方や、大きな社会変化を望まない志向性などの価値観も具有している点から見れば、扱いやすい若者たちといってもよいのではないだろうか。もちろん過去の若者と比べて変わっている点も見出されたが、それらは決して突然変異的に生まれたものではなく、時代の変化——特に経済的な豊かさの浸透——によって徐々に変わってきた部分と言えよう。おそらく、「個同保楽主義」という価値観はある程度豊かな中流意識を持った人々には適合的な価値観であり、いずれ若者だけでなく、日本社会全体の支配的な価値観になるのではないだろうか。これが、第1回目の調査結果から語ったことの骨子である。

その5年後に、今度は若者のコミュニケーションの実態と意識をも含めて、第2回目の価値観調査を行った。そこで明らかになったことは、「個同保楽主義」という価値観に大きな変化はないが、伝統的性別役割に対して懐疑的な考えの若者が増えていること、社会関心や政治関心などのさらなる低下が確認された。また、コミュニケーションに関しては、かなり良好な親子関係、高い群れ感覚・群れ行動、かなり多い友人数などの特徴が見いだされた。

そしてその5年後である1997年に第3回目の調査を行ったわけである。今回の調査のポイントは、10年前、5年前の学生の意識や価値観との比較をすることにあるが、時代状況を踏まえていくつかの新しい質問項目も入れたので、これらも「個同保楽主義」の価値観と関連させながら分析してみたい。

価値観の変化を見ていく上での私の基本的な考え方は、次のようなものである。価値観は社会によって作られるものであり、社会が変化すれば価値観も変化せざるをえない。ただ、社会の変化の中には急速なものもあれば、緩慢なものもあり、それに伴って価値観の変化も緩急様々にある。一般的に言って、社会にとって突発的で外在的要因による変化は急速で不安定なものになりやすいのに対し、漸次的で内在的な要因による変化は緩慢だが安定的なものになりやすいと言えるだろう。10年という時間はこうした価値観の変化を計るのに決して十分な長さではないが、かといって何も見だし得ないほど短い時間でもないだろう。10年程度ではその変化は見えにくい非常に長期的な変化をする価値観もあれば、10年程度で時代の影響による変化がはっきり見てとれる価値観もあるだろう。中には、最近生じた事件や出来事の影響で価値観が急速に変化しているが、そうした変化の方向は安定的なのかどうかまだ判断がつかないものもあるだろう。こうした点を念頭におきつつ分析をしていこう。

1. 調査方法と調査対象者の基本属性

今回の調査は、1997年10月半ばから11月初めにかけて、関西の四年制共学大学4校と四年制女子大学1校、短期大学2校の学生800人以上を対象に行った。具体的には、桃山学院大学、関西大学、関西学院大学、大阪大学、神戸女学院大学、京都女子短期大学、帝塚山学院短期大学

の7校である¹⁾。調査方法は主として授業時間内を利用した集合調査法で行ったが、部分的に配票調査法も利用している。ともに自記式調査法であり、調査方法の違いによる影響はあまり斟酌する必要はないと考えられる。また、こうしたやり方は前2回の調査と同様の方法であり、過去との比較をする上で問題はないだろう。有効に利用した調査票数は786票である。各大学別に有効調査票数を見てみると、桃山学院大学162(20.6%)、関西大学270(34.4%)、関西学院大学156(19.8%)、大阪大学83(10.6%)、神戸女学院大学54(6.9%)、京都女子短期大学41(5.2%)、帝塚山学院短期大学20(2.5%)である。2つの短期大学は数が少ないので、1つのグループとして扱うことにしたい。前2回を含めた3回の調査の大学別有効調査票数とその割合を表1に示しておく。

表1 大学別に見た3回の有効調査票数

	97年(今回)調査	92年調査	87年調査
桃山学院大学	162(20.6)	125(21.4)	180(32.7)
関西大学	270(34.4)	160(27.4)	109(19.8)
関西学院大学	156(19.8)	100(17.1)	
大阪大学	83(10.6)	77(13.2)	89(16.2)
神戸女学院大学	54(6.9)	55(9.4)	115(20.9)**
短期大学	61(7.7)	68(11.6)*	57(10.4)***
総数	786	585	550

* ……21校の短期大学生が含まれている。

** ……神戸女学院大学ではなく、同志社女子大学。

*** ……4校の短期大学生が含まれている。

学部別では、3回とも文系学生が圧倒的多数(97年:98.1%, 92年:100%, 87年:94.4%)を占めており、特に社会学部生の割合が高い。(97年:67.2%, 92年:48.2%, 87年:44.2%)学生たちの行動やファッションを見ていると、学部別のカラーがあるようにも思うが、大学別や性別の分布に偏りがありすぎるので、ここでは重要な説明変数とはしない。

学年別では、1回生が27.7%, 2回生が39.6%, 3回生が21.6%, 4回生が11.1%である。授業時間を利用しての調査が中心なのでどうしても学年分布にばらつきが出てしまうが、これは前2回の調査でも同様であり、時系列比較をする上ではほとんど問題はないと考えられる。

性別では、男性が44.9%, 女性が55.1%であり、女性の方が1割ほど多い。共学大学では、男性がやや多かったが、神戸女学院大学と短期大学の分がすべて女性なので、こうした分布になった。前2回の調査でも、87年調査は、男性50.7%, 女性48.0%だったが、92年調査では、

1) 調査に協力してくれた7校の学生諸君と、仲介の労をとっていただいた白倉幸男大阪大学人間科学部教授、宮本孝二桃山学院大学教授、難波江和英神戸女学院大学教授にこの場を借りて心からお礼を申し上げます。

男性41.7%、女性58.3%と、今回よりも女性の割合が高かった。女子大学や短期大学を必ずデータとして含み込んでいる上に、社会学部をはじめとする社会科学系学部への女性の進学率が上昇しているので、やむをえざる傾向と言えよう。

2. 家族や友人とのコミュニケーション

「一番大切なものは何か」と毎回自由回答法形式で尋ねてきているが、そこで常にトップにあげられるのが、家族や友人との人間関係である。この調査に限らず、人間関係を若者たちが重視している様子はいろいろな所で見受けられる。携帯電話やポケベルがこれだけ若い人の間に普及しているのも、友達や恋人と撮ったプリクラを手帳に山のように貼っているのも、すべて人間関係を重視していることの表れと言えよう。「拡大された自己」の一部として位置づけられる家族や友人たちは、「個同保楽主義」の価値観を持った若者たちにとっては、自らのアイデンティティにも関わるもっとも重要な存在なのである。もちろん家族と友人とではその関係性に違いも大きいので、それぞれ別々に見ていこう。

まず、親子の間で会話がどの程度なされているかを見てみると、父親とよく話す者は27.1%しかいないのに対し、母親とよく話す者は64.5%にのぼる。両者の差は大きい、男は外で働き、女は家庭を守るという性別役割分業がまだまだ一般的である日本社会においてこの程度の差が出てくるのは当然と言えよう。この質問は10年前の1987年にも行っているが、その時の回答傾向と比べて大きな差は出ておらず、親子のコミュニケーション頻度に関しては変化は読み取れない。ただ、若い世代には、男女を問わず結婚しても女性も仕事をもち続けるべきだし、男性はもっと家庭にかかわるべきだという考え方が急速に増えてきているので、さらに10年ほど経ったときには、かなり変化が表れているかもしれない²⁾。男女別で見ると、父親とのコミュニケーションでは大きな差は出ていないが、母親とのコミュニケーションでは、やはり同性である女子学生の方が男子学生より密なコミュニケーションを取っていると言える。(母親とよく話す人の割合は、男性が48.7%であるのに対し、女性は77.4%である。)コミュニケーション頻度に大きな影響を与えるのではないかと予想された自宅住まいか下宿住まいかは、多少の差はあるものの予想した程には大きな影響を与えておらず、男子の下宿生が自宅生と比べて母親との会話がやや少なくなる程度である。

次に、親から言われたことで肝に命じていることが何かないかという質問に対する回答を見よう。この質問は、親から子にどのような価値観が伝達されているかを見ようとする狙いがある。自由回答形式で尋ねているため、回答を面倒がられ、「ある」と答えた人は38.5%に過

2) ただし、あくまでも女性が家庭の中心になるかぎり、父母とのコミュニケーションの差はそれほど大きくは埋まらないかもしれない。

ぎない³⁾が、実数で言えば303人もいるので、彼らの書いてくれたものからどのような価値観が伝えられているかをほぼ捉えることはできるだろう。その具体的な中身を見てみると、「金で体を売るな」、「子どもだけは作るな」、「結婚は遅ければ遅い方がいい」といった今風の教訓も極少数含まれているが、大多数は非常にオーソドックスな教訓である。多かったものとしては、「人に迷惑をかけない」、「自分のことは自分でする」、「健康には気をつける」といった教訓であった。多少強引かもしれないが、現在の若者たちに与えられている教訓をまとめて言えば、「人に迷惑をかけない範囲で、自分のやりたいことをやりなさい。ただし、体に気をつけて、責任は自分で取る」といったことになるだろうか。こうして書いてみると、実にまっとうな価値観が親から子に伝えられていることに気づく。この質問は、10年前にも同じ形で尋ねているが、そこで出てきた教訓も今回の教訓とほぼ同様のものであった。しいて、違いを探せば、10年前には数人があげていた「女らしくしなさい」といった教訓が、今回はひとりしか出てこなかったことと、今回はほんのわずかだった性に関係した教訓が、今回かなり目につくようになったことであろうか。もちろん大きな数ではないので、明確な変化とまでは言えないかもしれないが、ある種の状況の変化を示していると見ることもできるかもしれない。親から子に言われる言葉はたくさんあるにちがいない。そのうちのどれを肝に命じるかは受け止める側の意識の問題である。たとえば、「女らしくしなさい」という言葉が、今回ほとんどあげられなかったのは、この10年間の間に親から娘に全く言われなくなったというよりも、むしろ受け止める側の娘たちが社会状況の変化からこの言葉をあまり重く受け止めなくなったと解釈した方がよいだろう。上で、まとめたようなオーソドックスな教訓も大多数の親が子に伝えていると考えられる。しかし、それを肝に命じるかどうかは受け止める側の問題である。そう考えると、たとえ自由回答形式という煩雑さがあっても、6割以上の学生が肝に命じている言葉はないと答えているのは、気にならなくもない。

「親のようになりたいか」という質問に対しては、女子学生の方が肯定的回答が多く、「思う」と「やや思う」を合わせると、2/3近くになる。これに対し、男子の方は、漸く過半数(52.4%)を超えるにすぎない。この項目は、ジェンダー意識との関連が高いことが5年前の調査で確認されているが、今回もやはりこの関連は認められる。性別役割分業がほとんどの家庭で行われており、そうした生き方をしている同性の親を肯定的に捉えるということは、伝統的性別役割自体を肯定することにつながりやすい。ただし、今回の調査で表れた数字を前回(1992年)の調査と比較してみると、今回の調査で「親のようになりたい」と答えた人たちのジェンダー意識が、前回の調査で「親のようになりたい」と答えた人たちの比率に近くなっている。中には、それよりもさらに伝統的性別役割を否定する意識が強くなっている項目もある【表2参

3) 10年前にも同じ形で質問を行っているが、「ある」と回答したものは、37.1%であり、ほとんど比率は変わらない。また、親とのコミュニケーションが多いほど、肝に命じていることがあると答える人が多いという点も変わっていない。

表2 「親のようにになりたいかどうか」とジェンダー観の関連 (92-97) 単位：%

	(男)		(女)		(子)	
	92年	97年	92年	97年	92年	97年
	父親のように 思う	父親のように 思う	母親のように 思う	母親のように 思う	親のように 思う	親のように 思う
	そう 思わない	そう 思わない	そう 思わない	そう 思わない	そう 思わない	そう 思わない
(男 (女) らしいは嬉しいか)	***	**	***	**	***	***
1. はい	57.6	49.2	56.5	49.4	47.2	35.6
2. 一概に言えない	42.4	41.1	40.2	39.9	48.6	59.4
3. いいえ	0.0	9.7	3.3	10.7	4.1	5.0
(男 (女) らしきは必要か)	*	***	***	***		**
1. 絶対必要	31.4	25.8	16.8	18.6	18.3	7.9
2. どちらかといえれば必要	59.3	54.8	70.3	52.7	66.2	73.3
3. どちらかといえれば必要ない	8.5	12.9	9.2	17.4	13.2	17.0
4. まったく必要ではない	0.8	6.5	3.8	11.4	2.3	1.8
(改姓)	***	***	***	***	**	***
1. 当然妻が名字を改めるべきだ	17.0	11.3	10.9	6.0	11.4	5.8
2. 現状では妻が名字を改めた方がよい	48.3	28.2	35.9	19.9	37.9	27.3
3. どちらが名字を改めてもよい	23.7	40.3	33.7	47.6	41.1	48.2
4. 夫と妻は別々の名字のままよい	11.0	20.2	19.6	26.5	9.6	18.7
(女性の仕事)	**	***	***	***	***	*
1. 結婚したら家庭に専念した方がよい	19.0	15.0	11.5	10.8	14.7	7.2
2. 子どもができたなら、家庭に専念	52.6	38.3	46.4	31.3	41.7	33.0
3. できるだけ職業を持ち続ける	28.5	46.7	42.1	57.8	43.6	59.8
(家事・育児)	***	***	***	***	***	**
1. 妻がやった方がよい	6.8	6.5	8.1	5.4	4.6	1.1
2. 夫もできるだけ協力すべき	77.8	72.6	66.5	61.1	76.3	60.6
3. 公平に分担すべき	15.4	21.0	25.4	33.5	19.2	38.3
(生まれ変わり)						
1. 男性に	89.7	85.2	82.2	76.0	36.5	38.4
2. 女性に	10.3	14.8	17.8	24.0	63.5	61.6

(カイ二乗検定 *****P<0.01 ***P<0.05 **P<0.10)

照】。それだけ、社会全体における男女平等化志向が進んでいるということだろう。前回の調査では、この項目は、自衛隊や天皇制の存続を問う意識とも関連が出ていたが、今回の調査ではあまり明確に表れなかった⁴⁾。むしろ、今回目についたのは、ボランティア志向との関連である。男女とも「親のようになりたい」と答えた人たちが、「親のようになりたくない」と答えた人たちよりも、ボランティア志向が強い。女子の場合は、これまでに反核・平和運動に参加したいと思ったことがあるという人の割合も多い。ここから類推されることは、素直で他人の痛みを共感できるようなタイプが親のことも肯定的に捉えているということであろう。

将来における親との同居希望には、単純な性差は表れておらず、この回答を左右しているのは現時点における親との関係性である。前回の調査で、親——特に母親——との関係性が将来の同別居の意思に大きな影響を与えていることが確認された⁵⁾が、今回も、親とよくコミュニケーションを取っており、親を肯定的に評価している人の方が将来の親との同居希望が高いという結果が表れている。

次に、友人関係を見てみよう。まず親友数は、全体の平均で、4.92人であり、92年調査の5.04人と比べるとやや減ったが、5人程度という点ではあまり変化はないと言えよう。男女別では、男性の平均が5.45人、女性が4.48人で、男性の方が多い。この男女差は前回調査でも出ており、どうやら確実な差と言えそうである。ただし、親友はひとりもないと答えた人やひとりしかいないと答えた人は、女性よりも男性に多い。つまり、男性は、親友数の少ない者と多い者の両極を含むのである【図1参照】。男性の中でも、特に友人の性質として「明るさ」、「元気さ」、

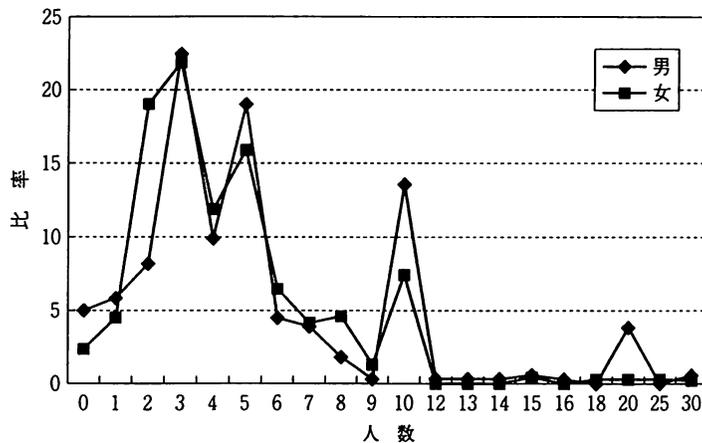


図1 男女別親友数

4) 唯一、男子において、「親のようになりたくない」と答えた人の方が、「なりたくない」と答えた人よりも、天皇制を無くした方がいいと答える割合が有意に高かった。(44.9% : 28.8%)

5) 片桐新自 1993「若者のコミュニケーションと価値観」『関西大学社会学部紀要』第25巻第2号、P.102を参照。

「ノリよき」などを好む人の親友数が多い。また、男女とも、「友人を探して一緒に昼食を食べに行く」ことや、「特別な目的もなく友人とぶらぶらする」ことが多い人ほど親友数が多いという結果が出ている。こうしたことからやはりたくさん親友がいると答えている人たちにとって親友とは、明るく楽しく気楽に付き合う存在になっているとすることができるだろう。こうした親友イメージから言えば、親友数が多い人は親友の考え方や行動をまちがっている指摘しなさそうであるが、必ずしもそういう結果にはなっていない。忠告すると答えた割合がもっとも高かったのは、親友数2名の層(72.5%)であり、3,4名の層(66.9%, 69.9%)もかなり高い。5名以上(55.4%)になるとこの割合は減少するが、10名以上(66.3%)でまた高くなる。逆に親友数が0人(50.0%)や1人(53.8%)の層では忠告するという者の割合が低い。以上の点から、人数だけで友人関係の付き合いが深いか浅いかを十分に判断することはできない。むしろ、現代の若者は彼らなりに友人を大事にして、付き合っているのだろう。

好まれる友人の性質は、表3の通りである。前回の調査では同じ16項目の中から重要と思うものを3つだけ選んでもらう形式で尋ね、今回はいくつ選んでもらって構わないという異なる形式で尋ねた。この回答形式の違いから興味深い知見が得られた。全体で順位を大きくあげたものは、「ユーモアがある」(6位→3位)、「親切的な」(13位→7位)、「元気な」(12位→9位)などである。特に、「ユーモアがある」は男子では、前回の6位から1位にあがっている。3つだけ選ぶということなら、ぜひ備わっていてほしい性質に回答が集中せざるをえないが、いくつでも選んでいいということであれば、不可欠ではないが備わっていればよりよいという性質もかなり選択されることになる。つまり、今回順位を上げたものがまさにそうした性質にあたるのだろう。この16項目を因子分析にかけてみると、固有値1.00以上の因子が5つ見いだされる。そのうちの第1因子と関連が強い項目は、「明るい」、「ユーモアがある」、「ノリよき」、「元気な」の4項目であり、この第1因子は「ネアカ因子」とでも名付けられるかもしれない⁶⁾。この「ネアカ因子」と関連の強い4項目で、前回から今回にかけて男女別で見ても全体で見ても順位を下げたものはひとつもない。すなわち、この「ネアカ」的性質こそ、友人の性質として不可欠ではないが、できればあってほしいものとして望まれているものと言えよう。

友達に合わせて行動するかという質問に対しては、76.3%が「合わせる」と回答し、22.0%が「一人でも自分のしたいことをする」と回答している。前回の調査でも、79.8%と19.1%なので、時系列的な変化自体はほとんどないと言えよう。8割近い多数派はみんなに合わせ、約2割程度の学生が自分のやりたいようにやるのである。「協調性」や「和」が重んじられる日本社会においてこうした比率の差が出るのは当然と言えよう。8割は、日本社会のオーソドック

6) ちなみに、第2因子は、「思いやりのある」、「頼りになる」、「親切的な」と関連が強いので、「やさしさ因子」、第3因子は、「正直な」、「責任感のある」、「礼儀正しい」、「まじめな」と関連が強いので、「まじめさ因子」と名付けることができる。第4因子と第5因子は、適当なネーミングをできるほど特徴がはっきりしていない。

表3 好む友人の性質

	男子		女子		全体	
	97年	92年	97年	92年	97年	92年
1. 思いやりのある(****)	56.7② (1)	77.4① (1)	535(68.1)	(1)		
2. 明るい(****)	55.8③ (4)	67.7② (2)	490(62.3)	(2)		
3. ユーモアがある	57.2①↑ (6)	55.4⑤ (6)	442(56.2)	↑ (6)		
4. 正直な(****)	44.8⑥ (2)	61.4③ (3)	424(53.9)	(3)		
5. 頼りになる(**)	46.7⑤ (3)	55.9④ (4)	407(51.8)	(4)		
6. 責任感のある(**)	48.4④ (5)	41.8⑥ (5)	352(44.8)	(5)		
7. 親切な(*)	34.6⑧↑ (13)	40.9⑦↑ (12)	299(38.0)	↑ (13)		
8. ノリのよい(*)	40.8⑦ (7)	34.6⑨ (9)	294(37.4)	(9)		
9. 元気な(****)	28.3⑩↑ (12)	37.4⑧ (9)	262(33.3)	↑ (12)		
10. 寛大な	31.2⑨ (10)	28.6⑩ (7)	234(29.8)	(7)		
11. 礼儀正しい	28.0⑪ (8)	28.2⑪↑ (13)	221(28.1)	(11)		
12. 知的な	24.4⑫ (11)	22.6⑬ (8)	184(23.4)	(8)		
13. まじめな	23.2⑬ (9)	22.6⑬ (11)	180(22.9)	(10)		
14. 聞き上手な	19.3⑭ (14)	23.6⑫↑ (14)	170(21.6)	(14)		
15. かつこいい(****)	10.5⑮ (16)	5.3⑮ (15)	60(7.6)	(16)		
16. 男(女)らしい(****)	10.2⑯ (14)	1.6⑯ (15)	43(5.5)	(15)		

(*がついている項目は、今回の調査で男女間で有意な差が出たもの。

カイ二乗検定 ***…p<0.01, **…p<0.05, *…p<0.10)

(92年に関しては、順位のみを示している。)

(上向きの矢印は、92年から97年にかけて2ランク以上順位をあげた項目。)

スな価値観の持ち主と言えようが、「他人に合わせない」という残りの2割の人の価値観はどのようなものであろうか。これを明らかにするために、この質問項目と様々な質問項目との関連を見てみると、実に多くの項目との間で相関が見られる。基本的に言えることは、「友達に合わせる」という人たちに比べ、常にラディカルな選択肢を選ぶ傾向が強いという点だ。たとえば、人生観では、「人生は闘争だ」という選択肢を選ぶ割合が多く（「合わせる人」が28.2%に対し、「合わせない人」は38.0%、以下同様の比率を示す）、生活目標でも「その日その日を自由に楽しく過ごす」という選択肢を選ぶ割合が多い（27.5%：37.4%）。転職を肯定する人の割合は高く（62.8%：83.2%）、上司のタイプとしては「ビジネスライク」な人がいいという回答する者が多い（26.5%：37.8%）。一番大切なものは「自分自身」と答える人が多く（22.1%：32.7%）、自分らしさはつかめているという人が相対的に多い（「はっきりつかめている」と「だいたいつかめている」を合わせた割合が、35.7%：49.1%）。早く社会に出て働きたいと考えている人も多く（23.5%：31.2%）、自分に自信をもって、我が道を行くタイプなのであろう。では、その彼らが社会関心や政治関心は高いのかということ、これは決して高いとは言えない。「友達に合わせて行動する」と答えた人たちよりも有意に高い値を示す項目はほとんどない。ただ、天皇制度の存続に否定的な人がやや多いのと、共産党以外の政党を「嫌いだ」と答える割合が高く出てきている点が見いだされる程度である。しかし、他の項目との関連から考えるならば、これらも健全で建設的な批判精神に基づいたものというよりも、厭世的な否定意識の表れではない

現代学生気質 (片桐)

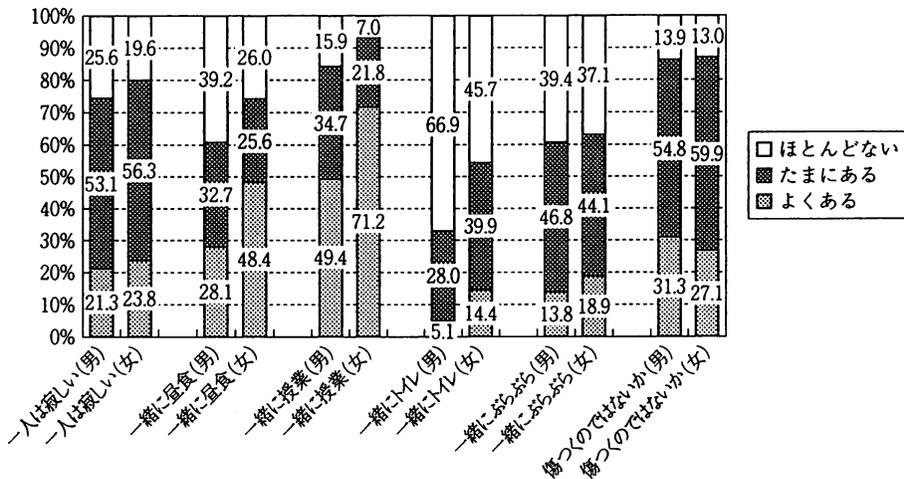


図2 群れ感覚・群れ行動

かという感じがする。

この「友達に合わせるかどうか」という質問項目がもっとも強い関連を示すのは、やはり「群れ感覚」や「群れ行動」を表す質問との間である。もちろん、その関係は「群れ感覚」が高く「群れ行動」をよくする人は、友達に合わせて行動するということだ。この「群れ感覚」や「群れ行動」についてさらに詳しく見ていこう。男女別では、女性の方がやや「群れ行動」を多くとることは、前回の調査ですでに確認されたことだが、今回も同じ結果が出ている【図2参照】。なぜ女性の方が「群れ行動」を多くとるかについては、前回の論文で考察しておいた⁷⁾ので、ここで繰り返すことはしない。授業や食事やトイレまで一緒に行き、特別な目的もなく友人とぶらぶらするといった「群れ行動」を若者がよく行うのは、「一人でいるのは寂しい」という意識が根本にあるからである。では、その「一人でいるのは寂しい」という意識はどこから生まれてきているのだろうか。かつて高田保馬が「人間には群居本能がある」と指摘したように、「一人であることを寂しい」と感じる心情自体は人間が集団生活を営む動物である限り、かなり根源的なものであろう。ただ、学生たちはそう思う頻度が社会人よりかなり高いのである⁸⁾。その原因として考えられるのは、学生たちが時間的、社会的にあまり拘束されていないことである。職業を持ち、家庭を持った社会人——社会的地位を確立した人々——において「一人でいるのが寂しい」と思う割合が大きく減少しているのは、現実的に自分は一人ではないということ

7) 片桐新自 1993, PP.110-112を参照。

8) 1995年に行った20歳代後半から30歳代はじめの人を対象にした調査では、「よくある」と答えた人が12.8%、「たまにある」と答えた人が47.2%にすぎない。特に、既婚者では、「一人でいるのが寂しい」と思う人は大幅に減っている。片桐新自 1996『『新人類』は今——「大人」になりきれない『若者』たち——』『関西大学社会学部紀要』第28巻第1号, PP.130-131を参照。

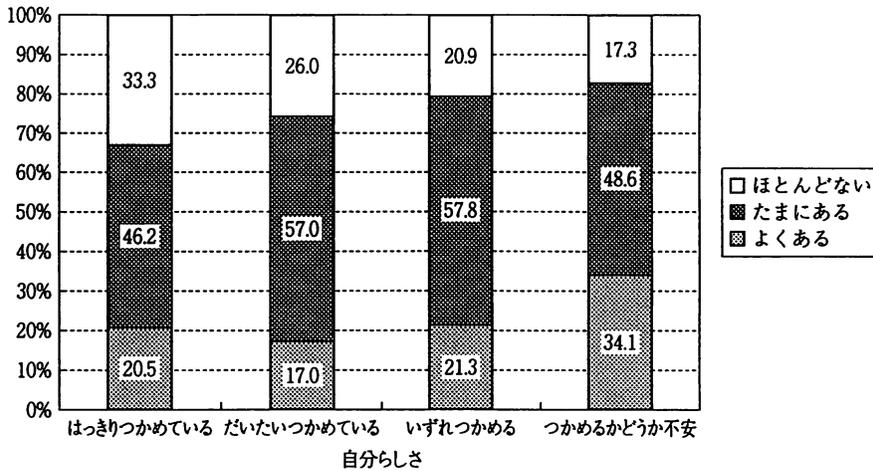


図3 「自分らしさ」*「群れ感覚」

実感しているからであろう。様々な面で拘束されているということは、逆に見れば自分という人間が他者から必要とされていることの証でもある。すなわち、この「一人であるのが寂しい」と思うかどうかは、アイデンティティ問題とも通底するのである。実際今回の調査でも、「自分らしさ」をつかめていない人の方が、「一人であるのが寂しい」という思いを抱いているという結果が出ている【図3参照】。「自分らしさ」が明確につかめないまま一人で過ごすのは、自らの存在が誰からも必要とされていないような不安感に陥る可能性を持つ。他方、友達とともにいれば、とりあえずその人間関係の中で自らの存在を確認することができる。これが、学生たちに「群れ行動」を取らせやすくする原因であろう。

「一人であるのが寂しい」と思う頻度が高いほど、「こんなことを言ったら、友人が傷つくのではないか」と思う頻度も高い。こうした相関関係がでるのは、上で述べてきた観点から見れば、当然であろう。一人であるのは寂しいと思い、友人との人間関係の中で自らの存在を確認しようとしている若者たちにとって、友人を傷つけ人間関係を壊してしまうことはもっとも恐れるべきことである。当たり障り無く友人関係を続けることこそ、最重要事項なのである。自分自身も傷つきやすく、それゆえに相手を傷つけてしまうことにも過敏になっている若者の姿はあちこちで見かけることができる。今回の調査でも、「友人が傷つくのではないか」と思うことがほとんどないと答えた人は、13.4%に過ぎない。容易に予想されることであるが、「友人が傷つくのではないか」と思う人ほど、やさしい性質の友人を好むという結果も出ている。

3. ジェンダー観と性的交渉

ジェンダー観や男女の役割や関係のあり方に関する意識は、この10年の間にもっとも大きな

変化をした。87年調査の段階でも、それ以前の類似の調査結果との比較から、男女平等化志向へ確実に向かっているという指摘をした⁹⁾が、さらにその5年後、10年後と調査を行って来て、まだその進行がドラスティックに続いていることが明らかになった(表4参照)。例えば、結婚の際に妻が名字を改めるのは当然だといった考え方は、87年調査では17.3%いたが、92年調査では11.3%になり、今回の調査では7.0%になった。また、女性は結婚したら家庭に専念した方がいいという考え方は、87年の24.2%から、92年に13.5%になり、今回は9.2%になった。こうした古い考え方が減少する代わりに、別姓夫婦志向(8.7%→13.3%→21.6%)や女性もずっと仕事を持ち続けるべきだという考え方(38.0%→43.8%→56.7%)が支持を大きく増やしてきている。92年調査から導入した家事や育児の分担についての質問でも、女性の方が向いているので、妻が中心になって行こうという考え方が減少し、どちらが向いているかなどとは言えないので、公平に分担するべきだという考え方が大きく増えてきている(23.2%→36.4%)。こうした男女平等化志向への流れは、まさに社会の内在的必要性から生み出されたものであり、余程のことがない限り、反転することはないだろう。最終的にはここで尋ねたような質問をすること自体が無意味になるようなところまで進むのかもしれない。

上記の3項目は結婚の際、あるいは結婚後の性別役割であるが、結婚前の性別役割として、デートの際の費用は男性が全部あるいは多めに払うというものがある。これについても92年調

表4 性別役割に関する意識の変化(87年—92年—97年) (%)

	87年調査	92年調査	97年調査
(改姓)			
1. 当然妻が名字を改めるべきだ	17.3	11.3	7.0
2. 現状では妻が名字を改めた方がよい	34.3	36.6	24.9
3. どちらが名字を改めてもよい	39.5	38.6	46.1
4. 夫と妻が別々の名字のままでよい	8.7	13.3	21.6
DK, NA.	0.2	0.2	0.4
(女性の仕事)			
1. 結婚したら家庭に専念した方がよい	24.2	13.5	9.2
2. 子どもができたなら、家庭に専念	36.2	41.4	33.3
3. できるだけ職業を持ち続ける	38.0	43.8	56.7
DK, NA.	1.6	1.4	0.8
(家事・育児)			
1. 妻がやった方がよい	調	5.1	3.8
2. 夫もできるだけ協力すべき	査	71.5	59.5
3. 公平に分担すべき	せ	23.2	36.4
DK, NA.	ず	0.2	0.3

9) 片桐新自 1987『『新人類』たちの価値観——現代学生の社会意識——』『桃山学院大学社会学論集』第21巻第2号, PP.138-139を参照。

査から尋ねている。その回答結果はと言えば、男性の負担割合の平均値が、前回の5.88割から5.68割に減少している。こんなところにも、男女平等化志向の波は来ているようだ。ただし、95年の社会人調査では、男性の負担割合は6.33割という結果が出ているので、数字自体の低さは大学生が対象者になっていることを考慮に入れておく必要があろう。

「男らしさ・女らしさ」に関しても、「絶対必要である」と考える人は、前回には21.2%いたが、今回は12.7%と大きく減った。ただし、その対極の考え方である「まったく必要ではない」(3.2%→5.0%)とか「どちらかといえば必要ではない」(13.8%→16.2%)という考え方を支持する人の増加はわずかであり、もっとも比率が上がったのは、「どちらかといえば必要である」(61.7%→65.5%)という意見である。また、「男らしい」とか「女らしい」と言われたら嬉しいかという問いに対する回答も、前回よりも嬉しいと答える人が減ってはいるものの、その減少はわずかなものでしかない(45.3%→42.9%)。そもそも「男らしさ」や「女らしさ」を不必要と見る人は2割強しかいないし、「男らしい」とか「女らしい」と言われて嬉しくないと言い切る人も1割に満たない。客観的な拘束として表れる性別役割分業に比べれば、「男らしさ」や「女らしさ」は主観的なイメージとしての側面が強く、前者ほどには強い反発を引き起こさないのだろう。こうした変化の進度の違いを見ると、たとえ性別役割分業がまったくなくなる時代が来たとしても、「男らしさ」や「女らしさ」はなんらかの形で残っているにちがいないという予測が立てられる。おそらく伝統的なジェンダーを全否定したところに新たな男女関係を築こうとするのはかなりの無理があり、伝統的なジェンダーの中で取捨選択が行われ、受け入れられるものは受け入れた上で新たな男女関係が築かれなければならないのだろう。

生まれ変わるなら男がいいか女がいいかという質問は87年から3回続けて行ってきた。87年調査の段階で男子学生の19.7%が女性に生まれ変わりたいという回答をしたので、従来の調査とのギャップが大きく非常に驚いたが、前回の92年調査ではこの割合は12.7%に減り、このまままた男性志向にもどるのかとも思ったが、今回再び20.7%と増加に転じた。この間、女子学生の方は、男性への生まれ変わり希望が徐々に増加し、今回は40.0%になった(87年:32.8%→92年:39.3%)【図4参照】。これは何を意味するのだろうか。女子学生の方は、バブル経済の最中にあり雇用機会均等法も施行されたばかりで欠点より長所ばかりが目立っていた87年当時に比べ、女子学生の就職状況が改善されないということがかなりの影響を与えているのではないかということも考えられるが、男子学生の女性への生まれ変わり希望の増加も考慮に入れるならば、やはり伝統的な男性役割や女性役割に対する批判が社会的に強まりつつあることの表れと解釈した方がいいかもしれない。当然、男女平等化志向との関連はあるが、あまり強く出てはいない。女子学生で男性に生まれ変わりたいとい希望者に男女平等化志向が多少強い——「女らしい」と言われても単純に嬉しいと思う者が少なく(女性再希望者が39.1%に対し、28.9%)、家事や育児は夫婦で公平にという意見が、半数を占める(女性再希望者が36.7%に対し、50.0%)——ものの、男子学生ではそうした傾向性ははっきりと読みとることができない。

現代学生気質 (片桐)

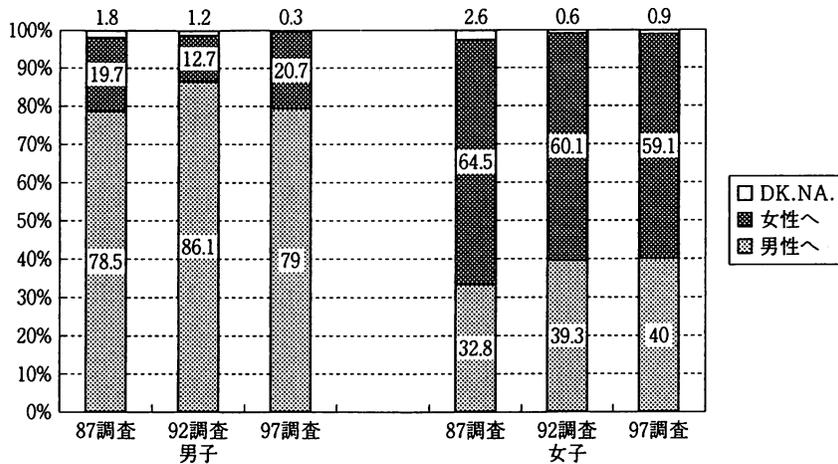


図4 生まれ変わり希望

むしろ、男子学生の場合に、この項目との関連が出るのは、現在の生活に対する不満感や自立心である。男性再希望者が現在の生活を不満とする割合（「どちらかといえば不満」+「かなり不満」）は、33.5%であるのに対し、女性希望者のそれは47.9%もある。また、「おとなになるより、子どもでいたい」と思う割合も、前者が44.0%であるのに対し、後者は54.8%もある。女子学生の男性への生まれ変わり希望者は、相対的に闘争志向や、社会に出て働きたいという意志も強く、男女間での不平等さも含め、自分の周りの状況を能動的に変えていきたいという積極的なタイプが多い。これに対して、男子学生の女性への生まれ変わり希望者には、男女間の不平等が云々と言うよりも、自分自身が「男」としてしんどいという思いを持ち、充実した生活を送れていないし、自分に自信を持ってないゆえに、消極的に「男」ではない性を選択したいと思う者が多いのではないかと推測される。

次に、結婚の意思を見てみよう。「いずれは必ず結婚したい」という人が58.8%、「適当な相手がいないければ、結婚しなくてもよい」という人が、35.9%、「結婚はしたくない」という人が、5.3%である。これは今回初めて尋ねてみた項目だが、厚生省人口問題研究所で同じような調査が行われている¹⁰⁾ので、それと比較することができるが、ほぼ同じような結果である。当然、この回答もジェンダー観と関連があり、伝統的ジェンダーに肯定的な人ほど結婚の意思は強い。伝統的ジェンダー観に対する否定的意識が強まる中で、今後「必ず結婚したい」という人は、さらに減っていくと予想される。「結婚はしたくない」という人は、それほど大きくは増えないだろうが、「適当な相手がいないければ、結婚しなくてもよい」という人がどんどん増えてくるだろう。そして、この層が日本の未婚率を上昇させることになるだろう。自分の期待するような

10) 厚生省人口問題研究所 1992『第10回出生動向基本調査II——独身青年層の結婚観と子供観』を参照。

「適当な」相手と出会うことは滅多にない——というより、「適当な」相手だと確信を持てるようなことは滅多にない——ので、じっくり考えれば考えるほど、結婚の決断はしにくくなるだろう¹¹⁾。個人としての自己実現をめざすためには、配偶者や子どもは足かせになる可能性をおおいに持つ。実際今回の調査でも、「自分らしい生き方」をはっきりつかめているという人が、男女とももっとも結婚したくないと答えた割合が高かった（男性：21.1%，女性：20.0%）。「自分らしく生きる」ことや、「個性的に生きる」ことがすばらしいことと強調される風潮の中で、配偶者を得、子どもを生み、育てるといふ雌雄の分かれた生物としては当たり前の生き方が、当たり前と思われなくなりつつあるようだ。

かつて結婚し夫婦関係を作ることのひとつの重要な意味として語られてきた性的欲求の充足は、若い人々の間では今や結婚とは無関係に充足されるものになっている。「結婚式がすむまでは、性的交渉（セックス）はすべきではない」という考え方は、87年調査では14.9%あったが、92年調査で4.6%になり、今回は3.4%になった【図5参照】。「結婚の約束をした間柄ならよい」という意見も、14.4%から、9.1%になり、今回は4.3%になった。性に関する意識は、この10年の間に確実にもっとも大きく変化した意識である。こうした面からも結婚の必要性は減じていると言えるだろう。

性に関する大きな意識の変化は、他方では、性を商品にしてお金を稼ぐ若者たちをも生み出している。そのひとつの典型が、いわゆる「援助交際」である。「援助交際」というと、女子中高生がセックスをしてお金を稼ぐというイメージがあるが、現実には、セックスはせずにデートだけで稼いでいる場合もあれば、年齢層ももう少し上の世代も含むこともあるようである。

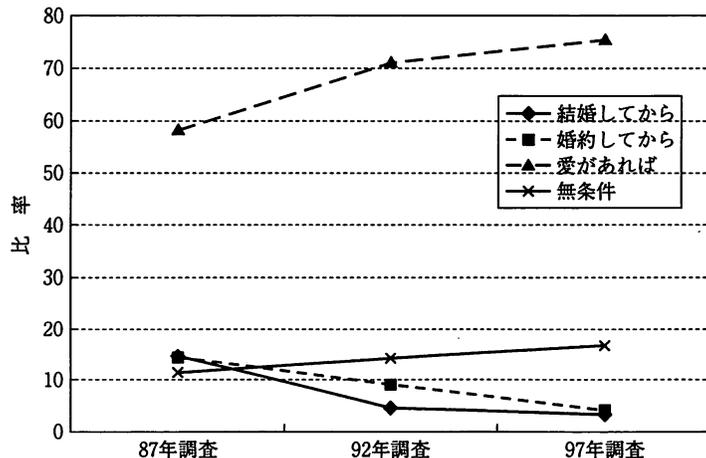


図5 性交渉に関する意識の変化

11) 「結婚しないかもしれない症候群」という言葉は、まさにこうした意識を言い当てたものである。

そこで、こうした性の商品化をやや一般化した形で若者たちがどう受け止めているかを尋ねてみた。

まず、女性がセックスの相手をして金品を受け取ることに関しては、「絶対にいけない」という人が全体で32.2%、「一概には言えない」という人が50.4%、「別にかまわない」という人が19.1%である。この数字をどう解釈するかは難しいところだろう。1/3近くの人が、「絶対にいけない」と答え、「かまわない」という人は2割以下しかいないのだから、学生たちは、決して性が商品化されることを肯定しているわけではないということもできるだろう。しかし、過半数が選んだ回答は「一概には言えない」である。一概に言えないと答えた人は、一体どういうケースならいけないと言い、どういうケースならかまわないと言うのだろうか。個人的に話を聞いた学生のひとは、「生活に困って、他に稼ぐ手段もない場合には仕方がないんじゃないですか」と話してくれたが、果たしてこの豊かな日本社会の中でこうしたケースを想定して答えた人がどれほどいるだろうか。もしそうなら、たとえば次の問いである「女性がセックスを含まないデートの相手をして金品を受け取ることをどう思うか」に関して、「絶対にいけない」が23.3%に減り、「別にかまわない」が31.2%に増えることの説明がつかなくなるのではないだろうか。特に、女子学生で「絶対にいけない」と答える割合が、39.8%から26.3%に大きく下がるのは、やはりセックスは妊娠など肉体的な危険を伴うので避けるべきだが、セックスがなければかまわないのではないかという考え方が象徴的に表れているように思われる。ただし、男性が性的交渉の相手をして金品を受け取ることに関しても、「絶対にいけない」という人が、女性の場合とそれほど変わらない29.1%いるので、妊娠という肉体的な危険のみが考慮されているわけではなく、本人が納得しているならばとか、他人に迷惑をかけないならばといった様々な条件も考慮されているのだろう。いずれにしろ、こうしたデータを見ていると、経済的利益を追い求める資本主義社会なのだから何が商品化されても不思議はないが、やはりある種の歯止めをかける必要性を感じる。性を売り、精子や卵子を売り、子宮を賃貸することを黙認する人間が増えていく社会では、次に何が売られることになるのだろうか。乳幼児が売り買いされるような社会にはなりはしないかと不安がよぎらなくもない。

4. 人生観と生き方

人生は他人との競争に打ち勝っていかなければならないものか(闘争志向)、それとも丸くおさめていくべきか(調和志向)という問いに対する回答傾向は、10年間でほとんど変化がなく、闘争志向が3割強、調和志向が7割弱である。性別で見た場合、女性の方が調和志向が強いというのも、一貫した傾向である。ただし、5年前の調査の時に、女子学生の闘争志向の割合がかなり上がり(87年:22.3%→92年:30.4%)、男子学生(87年:38.2%→92年:37.9%)との差が小さくなり、これは女性たちの重要な意識の変化を表しているのかもしれないと注目した

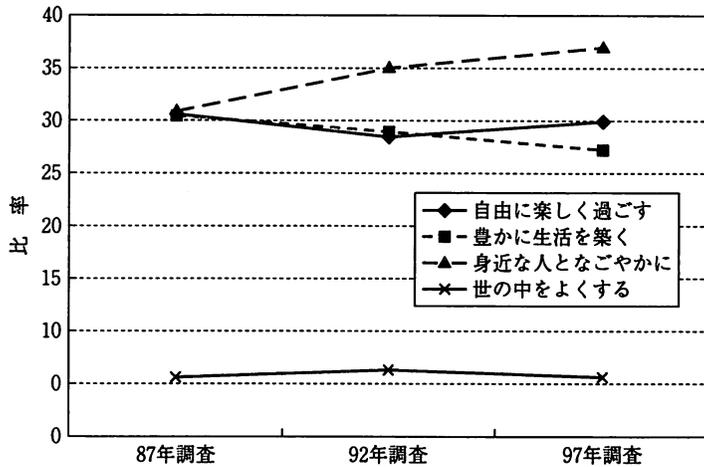


図6 生活目標

が、今回はほぼ10年前の水準に戻った(女子：23.0%，男子：39.6%)。大きな流れから言えば、やはり男女差は無くなっていく方向にあるはずだと思うが、とりあえず今回の調査結果からは、そういう傾向性は読み取れなかった。結論を出すには、もっと長期的に調べていくことが必要だろう。

人生観とともに、3回続けて尋ねている「生活目標」には、ある種の傾向性が読みとれるようである【図6参照】。「みんなと力を合わせて、世の中をよくする」という非常に社会性の高い目標と、「その日その日を自由に楽しく過ごす」という刹那主義的目標を選択する人は、それぞれ5%強と、30%程度でほとんど変化がないが、残りの2つの目標の選択に微妙な変化が見てとれる。それは、「しっかりと計画を立てて、豊かな生活を築く」という将来を見据えた上昇志向型の目標を持つ者が減り(30.5%→28.9%→27.2%)、他方で「身近な人たちと、なごやかな毎日を送る」という現状維持的な平穏さを求める目標を持つ者が増えている(30.9%→34.9%→36.9%)という変化である。これは、男女別で見ても確認される変化であり、比率の差はそれほど大きくはないが、ほぼ確実な傾向性のように思われる。5年前と今回と2回しか調査をしていないが、「ある程度の収入さえ得られるなら、出世するより気楽な地位にいる方がいい」という考え方を持つ者が、61.7%から68.3%に増えたことも同じ傾向性を示していると言えよう。すでに以前の論文で指摘した¹²⁾ことだが、豊かになった社会の中で暮らす人々は、上昇志向型の目標を持ちにくい。親しい人たちと現状維持的な平穏さの中で暮らすことがもっとも支持される目標となるのは当然と言えよう。こうした豊かさが続く限り、この傾向はさらに明確な形になって現れてくることだろう。

12) 片桐新自 1993, PP.122-123を参照。

次に、仕事観を見てみよう。3回連続で尋ねているのは、「仕事と余暇のバランスをどのように取っていくか」という質問と、「好む上司のタイプ」である。両者とも大きな変化は見られず、「仕事と余暇は五分五分で」という回答が過半数を占め(53.8%→57.1%→53.2%)、「無理な仕事をさせることもあるが、面倒見のよい上司」が約7割の人々によって好まれている点(74.4%→69.9%→70.9%)は、3回とも一貫している。しいて変化を探せば、「仕事と余暇は五分五分で」という回答を選ばない人の中では、余暇を重視したいという人が少しずつ増えていることがあげられる(27.8%→28.9%→34.3%)。あまり大きな増加ではないが、今後も少しずつ確実に増えていくことになるだろう。複雑化した高度管理社会では、自分の行った仕事かどのような結果につながったかを実感しにくくなっている。そうした状況の中で、仕事をする事自体に魅力を感じることは容易なことではない。まだ就職する前の学生たちだが、仕事をめぐるそうした状況は漠然とながらも感じている。いい加減にやろうとも思わないが、仕事に生きがいややりがいを求めることもしない、そんな仕事との付き合い方がますます増えてくるだろう。こうした仕事観からすれば、「早く社会に出て働きたい」という人が少ない(25.6%)のも、転職にこだわりがない人が多い(67.0%)のも、当然と言えよう。過半数には届かなかったが、「働かないでも楽に暮らしていけるだけのお金があれば、遊んで暮らしたい」と思う人も、前回(92年調査)の42.2%から今回は46.8%に増えた¹³⁾。

仕事に対する期待感の減退は、さらに大学生たちの自立心の低下にもつながっているようだ。自分はまだ大人だと思える人は減り(92年:25.3%→97年:20.5%)、子どものままでいたいという人は増え(92年:44.3%→97年:51.3%)、早く親から自立したいという人は減っている(92年:76.1%→97年:69.1%)。大きな比率の変化ではないので、この自立心の低下が確実な傾向かどうかはこの調査結果だけでは断言はできないが、日頃の学生たちの言動を考え合わせると、ほぼ間違いないように思われる。

こうした生き方に関係するものとして、今回はじめて「自分らしさ」をつかめているかどうかを尋ねてみた。自分らしい生き方を「はっきりつかめている」という人が5%、「だいたいつかめている」という人が33.8%、「今はつかめていないが、いずれつかめる」と思っている人が38.3%、「将来もつかめるかどうか不安」という人が22.9%であった。以前に調査を行っていないので、この単純集計結果をどう解釈するかは難しいところだが、ただ過去に遡って調査をできたとしても、「はっきりつかめている」という人が多数を占めている時代など見いだされることはないだろう。青年期はいつの時代でも、アイデンティティを確立できない——「自分らしい」生き方を見いだせない——ことに悩む時期であり、それはエリクソンによって「アイデンティティの危機」として指摘されている通りである。にもかかわらず、最近特に「自分らしく生きたい」とか「自分探し」といったことが喧しく言われるようになってきている。これには、

13) 男子学生だけで見ると、52.1%と過半数を超えている。

伝統的な性別役割が否定されるようになってきたことが大きな影響を与えていると考えられる。旧来の単純な「男らしい」生き方、「女らしい」生き方を素直に肯定できなくなった若者たちは、嫌でも「自分らしい生き方」を見つけなければならなくなっているのである。しかし現実には、伝統的な性別役割を否定したところに、自分らしい生き方を見つけることは容易ではない。それゆえ、今回の調査でも、伝統的ジェンダー観に否定的な人の方が自分らしい生き方をつかんでいるといった関連は見い出されない。旧来の男らしい生き方や女らしい生き方であっても、それが自分に合っていると思い、そうした生き方を積極的に受け止めるならば、それで自分らしい生き方を見つけたことになるので、自分らしい生き方をつかんでいることと、伝統的ジェンダー観を否定する意識は正の関連はしないのである。

では、どのような項目との間で関連が出るかという点、上で述べてきたような生き方や人生観、仕事観などである【表5参照】。自分らしい生き方を「だいたいつかめている」という人と「今はつかめていないが、いずれつかめると思う」と考えている人との間には、あまり大きな差はないが、「はっきりつかめている」と答えた人と、「今はつかめていないし、将来もつかめようかどうか不安だ」という人の差はかなり大きい。簡単に言えば、前者が積極的で能動的な考え方を持つものに対し、後者は消極的で逃避的な考え方を持っていると言えよう。たとえば、「はっきりつかめている」という人は、やや闘争志向的の人生観を持ち(45.9%)、生活目標では「しっかりと計画を立てて豊かな生活を築く」という上昇志向型目標がトップになっている(35.9%)。全体で5%程度しかいない「世の中をよくする」という社会志向型目標を持つ人も12.8%いる。当然、この層は、社会関心も他の人々より高く、新聞の購読スコアも高いし、ボランティア志向も、平和運動等への参加意欲も高いという結果が出ている。これに対し、「つかめようかどうか不安だ」という人の生活目標は、「身近な人たちとなごやかな毎日を送る」(44.7%)と「その日その日を自由楽しく過ごす」(33.0%)という現在志向型の目標が強く、「しっかりと計画を立てて豊かな生活を築く」は、17.3%しかいない。この層は自立心も弱く、「早く働きたい」と思う人は、わずか19.0%で、できることなら遊んで暮らしたいという人が56.7%、子どもでいたいという人が59.2%もいる。こうしたデータを見てくると、「自分らしい生き方」は、人によってそれぞれ異なるだろうし、実際につかめているのかどうか本当のところはよくわからないが、要は、自分に自信を持ってポジティブに生きていけるかどうか、自分らしく生きられるかどうかの試金石になっているようである。こうした自信を持った生き方は、生活満足感にも影響し、「はっきりつかめている」人では、8割近く(79.5%)が満足(「かなり満足」+「どちらかといえば満足」)だと答えているのに対し、「つかめようかどうか不安だ」という人で現在の生活に満足だという人は約5割(50.4%)しかいない。

現代学生気質（片桐）

表5 「自分らしさ」と他の項目の関連

	(自分らしい生き方)	
	はっきり つかめている	つかめるか どうか不安だ
(新聞の閲読度スコア)	0.92	**
(生活満足度)		***
1. かなり満足	38.5%	4.5%
2. どちらかといえば満足	41.0%	46.9%
3. どちらかといえば不満	10.3%	36.9%
4. かなり不満	10.3%	11.7%
(人生観)		***
1. 闘争志向	45.9%	26.1%
2. 調和志向	54.1%	73.9%
(生活目標)		**
1. 自由楽しく過ごす	23.1%	33.0%
2. 計画を立てて豊かな生活を築く	35.9%	17.3%
3. 身近な人たちとなごやかに暮らす	28.2%	44.7%
4. 力を合わせて世の中をよくする	12.8%	5.0%
(災害の祭のボランティア意欲)		
1. ぜひしたい	20.5%	8.4%
2. ややしたい	20.5%	31.8%
3. 一概には言えない	43.6%	45.3%
4. あまりしたくない	7.7%	10.1%
5. まったくしたくない	7.7%	4.5%
(平和運動への参加意欲)		
1. 参加したいと思ったことがある	28.2%	18.9%
2. 参加したいと思ったことはない	71.8%	81.1%
(早く働きたい)		**
1. そう思う	35.9%	19.0%
2. そうは思わない	64.1%	81.0%
(遊んで暮らしたい)		**
1. そう思う	38.5%	56.7%
2. そうは思わない	61.5%	43.3%
(子どもでいたい)		***
1. そう思う	35.9%	59.2%
2. そうは思わない	64.1%	40.8%

(カイ二乗検定 *****P<0.01 ****P<0.05 ***P<0.10)

5. 社会関心

学生たちの社会関心がどう変化してきたかを、新聞記事の読み方からまず見てみよう。この質問は10年前から全く同じ形で行ってきたものであり、正確な比較ができる。

表6 新聞閲読度スコアの変化

	87年	92年	97年
1. テレビ欄	1.81	1.77	1.79
2. 社会記事	1.34	1.28	1.13
3. スポーツ記事	1.25	1.22	1.09
4. マンガ	1.15	1.11	0.93
5. 地方版	0.94	0.95	0.87
6. 投書	0.91	0.89	0.83
7. 政治・外交面	0.98	0.93	0.71
8. 社説	0.68	0.65	0.67
9. ラジオ欄	0.89	0.49	0.60
10. 家庭婦人欄	0.58	0.69	0.57
11. 経済面	0.76	0.53	0.47
12. 小説	0.17	0.21	0.19
-----	-----	-----	-----
全体	0.96	0.90	0.82

(「必ず読む」を2点, 「時々読む」を1点, 「ほとんど読まない」を0点として計算した各項目の平均得点。)

表6を見れば一目でわかるように、学生たちは10年前、5年前、そして今回と徐々に新聞を読まなくなってきている。政治・外交面や経済面といった堅苦しい記事はもちろんのこと、社会記事、スポーツ記事、マンガといった読みやすい面すら、どんどん読まれなくなってきている。これは、学生たちの社会関心が全般的に低下しているということの表れでもあるが、それとともに注目すべきなのは、今や新聞というメディアが、若者にとっては情報を入手する主たる媒体ではなくなったということを表していると思われる。テレビでニュースはいくらでも知ることができるので、わざわざ新聞を読むことはないということになるのだろう。実際多くの項目が10年前と比べてスコアを大きく落とす中で、テレビ欄のスコアは10年前とほとんど変わらないのは、若者たちがテレビを重視していることの傍証とも言えよう。映像情報に子どもの頃から慣れ親しんだ世代は、その分だけ活字情報からは遠ざかっているようである。しかし、それでも社会関心の高い人はやはり新聞を読むだろう。テレビのニュースはあっという間に流れていってしまう。テレビからの情報だけで形成される関心は、浅く移ろいやすいものになるだろう。これに対し、新聞は自分のペースでじっくり読める。きちんと知識を持ちたいと思う人は、テレビからだけではなく、新聞からも情報を得ようとするだろう。それゆえ、新聞の閲読度が下がることは、やはり社会関心の低下を意味すると言えよう。

この新聞記事の読み方はずっとは大学差がかなりはっきり出ていた項目であった。特に、10年前は大阪大学の学生たちの新聞閲読度が高く、一般に言われる一流大学の学生は社会関心が高いという言説は当たっていたと思ったのだが、5年前の調査では、大阪大学の男子学生の新聞閲読度スコアが大きく下がり、遂に今回の調査では、男女とも共学大学の中でもっともスコアが低くなってしまった。5年前の大阪大学の男子のスコアを見たときは、サンプリングが厳密でないことによるものかもしれないとも思ったが、こうして今回の調査で、男女ともこんなにスコアが下がると、やはり単なるサンプリングの問題に還元することはできないように思わ

れる。より偏差値の高い大学に合格するためのノウハウだけを効率的に覚え込んできた学生たちは、その訓練が身についていればいるほど、漠然としており役に立つかわからないようなことに関心を持ってないのかもしれない。もしも、これが事実ならば、ちょっと恐ろしいような気もする。さすがに、偏差値の高さと社会関心の高さは逆相関の関係にあるとまではまだ言いきれないが、少なくともかつて想定されていたような順相関の関係にはもはやないと言わざるをえない【図7参照】。

新聞の閲読度から社会関心があまり高くないと主張することは、上で述べたような理由で、ある程度妥当性があると考えるが、関心は低くなりつつあるとは言え、全く無くなってしまったわけではない。そこで、情報を仕入れたメディアは問わず、どんな事件や現象に興味を持ったかを尋ねることによって、その関心がどのようなところに向けられているかを把握したい【表7参照】。1996年に話題となったニュースのうち、19テーマを選び、どの程度関心を持ったかを4段階で尋ねた。その結果、1位が「O-157問題」、2位が「オウム裁判」、3位が「薬害エイズ問題」となった。この3つのニュースは、社会的影響力の大きさやメディアの取り上げ方から言っても、上位にランクされるのは当然と言えよう。ただし、この19のニュースを因子分析にかけると、この3項目は、「北海道トンネル落盤事故」、「渥美清死去」、「英皇太子夫妻離婚」とともに、第2因子との関連が高いという結果を得る。この6項目に共通することとして考えられるのは、ワイドショーで時間を大きく割いて取り上げられていたニュースであるということだ。すなわち、第2因子は、「ワイドショー的関心因子」とでも名付けられよう。それゆえ、この上位3つのニュースもその深刻さを十分に理解して上位にランクされたというより、テレビ等でよく流されていたので、関心を持ったという可能性が高いように思われる。

これに対し、第1因子は7つのニュースとの関係が見られた。それは、「住専処理問題」「厚

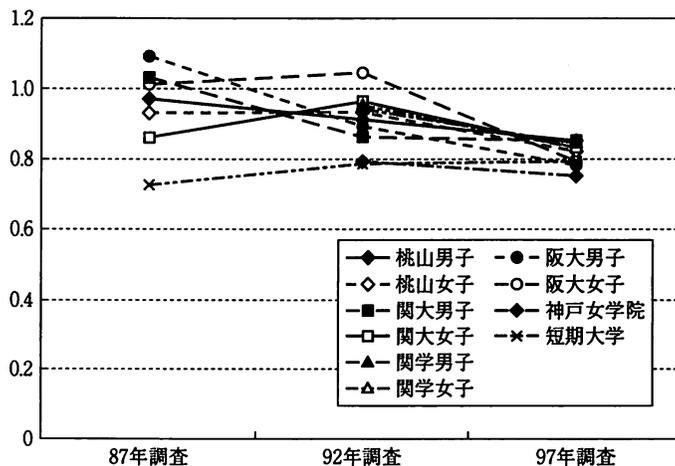


図7 新聞閲読度

表7 1996年のニュースに対する関心

	(全体)	(男子)	(女子)
1. O-157大量感染(W)	2.42	2.29	2.52
2. オウム裁判(W)	2.24	2.22	2.26
3. 薬害エイズ問題(W)(P)	2.19	2.08	2.29
4. ストーカーが話題(Y)	2.08	1.84	2.27
5. 北海道のトンネルで落盤事故(W)	2.02	1.84	2.17
6. アトランタ・オリンピック(S)	1.97	1.91	2.02
7. 援助交際が話題(Y)	1.88	1.74	1.99
8. 英皇太子夫妻が離婚(W)	1.69	1.35	1.96
9. 携帯電話が急速に普及(Y)	1.66	1.57	1.73
10. 沖縄問題(P)	1.64	1.65	1.64
11. フランス核実験終結宣言(P)	1.61	1.59	1.63
12. 2002年W杯日韓国開催決定(S)	1.57	1.84	1.35
13. 厚生官僚の汚職事件(P)	1.48	1.55	1.42
14. エアマックス人気(Y)	1.40	1.38	1.41
15. 住専処理問題(P)	1.32	1.43	1.22
16. 渥美清死去(W)	1.29	1.26	1.32
17. 伊達公子引退(S)	1.26	1.23	1.28
18. 小選挙区制での初選挙(P)	0.91	1.04	0.80
19. クリントン大統領再選(P)	0.90	0.95	0.85
(P)の平均値	1.44	1.47	1.41
(W)の平均値	1.98	1.84	2.09
(Y)の平均値	1.75	1.64	1.85
(S)の平均値	1.60	1.66	1.55

【「1. おおいに関心を持った」を3点、「2. やや関心を持った」を2点、「3. あまり関心を持たなかった」を1点、「4. 全く関心を持たなかった」を0点として計算した得点。】

【(P)……「政治的関心因子」との関連の高い項目、(W)……「ワイドショー的関心因子との関連の高い項目」、(Y)……「若者的流行関心因子」との関連の高い項目、(S)……「スポーツ関心因子」との関連の高い項目。】

生官僚の汚職」「小選挙区制での初選挙」「沖縄問題」「フランス核実験終結宣言」「クリントン大統領再選」「薬害エイズ問題」の7つである。これは、「政治的関心因子」と名付けられよう。表7を見てわかる通り、「ワイドショー的関心因子」との関連も高い「薬害エイズ問題」が上位に来るだけで、後はいずれも下位に属する。明らかに政治的関心は低いと言えよう。第3因子は、「携帯電話が急速に普及」「エアマックス人気」「援助交際が話題」「ストーカーが話題」の4ニュースとの関連が高いので、「若者的流行関心因子」と名付けられよう。この因子に関連のあるニュースは「ワイドショー的関心因子」に関連のあるニュースに次いで、比較的上位にランクされる。特に、「ストーカー」は全体で4位、女子学生だけなら3位になっている。これらのニュースは、若者たち、特に女子学生にとって身近なニュースとして受け止められたと言えよう。第4因子は、「アトランタ・オリンピック」「2002年W杯日韓国開催決定」「伊達公子引退」と関連が強いのので、「スポーツ関心因子」と名付けられよう。男女で比べると、男子の方が

この因子に関連のあるニュースに対する関心がやや高いが、非常に高いと言えるようなスコアではない。

その他に、社会関心を見て取れる項目としては、「食品添加物が気になるか」という質問や、「投票意欲」などがある。食品添加物に関しては、女子学生を中心に気になるという人がかなり多い（「非常に気になる」：16.9%、「やや気になる」：53.8%）。ちなみに、この質問の4つの選択肢に、先のニュースと同じスコア得点を与えて平均値を出すと、1.81になる。これは、序列の中に位置づけると、第8位の得点となり、比較的上位の項目ということになる。自分自身の体に直接的に悪影響を及ぼしているかもしれないものに対して、若者たちはそれなりに気にしていると言えよう¹⁴⁾。

「投票意欲」に関しては、10年前の第1回調査から聞いているので、時系列比較をすることができる【図8参照】。5年前の1992年調査の時は、日本新党が作られたばかりで、その翌年には、日本新党の党首であった細川護熙を首班とする非自民党政権が38年ぶりに作られる直前の時期にあたっており、衆議院選挙や参議院選挙といった国政選挙に対する意欲がかなり高まったが、その後の政治家たちの節操のない離合集散の動きから、今回は国政選挙に投票に行くという人がかなり減った。また、都道府県議会や市町村議会選挙に対する意欲も、過去3回で最低になった。こうした状況の中で、唯一投票意欲が過去最高になり、6つの選挙の中でも最も高い比率になったのが、市町村長選挙である。これは、市町村がもっとも身近な地域であ

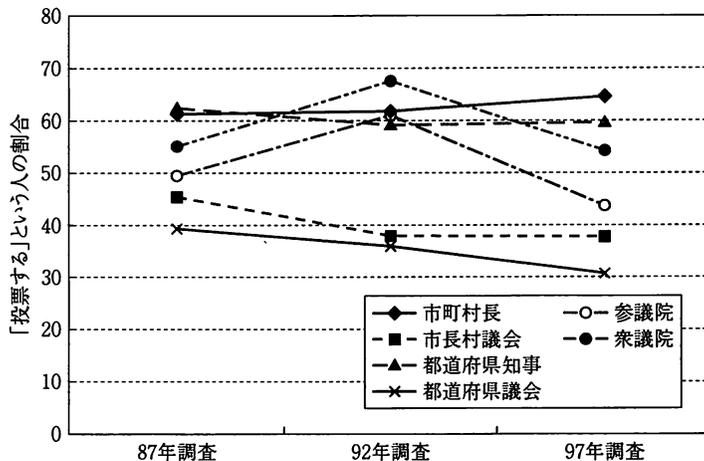


図8 投票意欲

14) 19項目のニュースとともに、因子分析にかけると、やはりこの「食品添加物」を気にするかどうかという意識は、ひとつだけ別の因子との関連を示し、他のニュースとグループ化されない。

り、そのトップに立つたった一人を選ぶ選挙であるがゆえに、自分の投票の意味をもっとも見だしやすい選挙だからであろう。特に、後者の理由は重要であると思われる。同様の理由で、都道府県知事選挙が2番目に投票意欲をもちうる選挙として位置づけられるのである。当然この延長線上には、首相公選制度があれば、投票に行くという人は多いだろうといことが予想される。そこで今回の調査で首相公選制度の導入について尋ねてみたところ、「賛成」が58.1%に対し、「反対」は7.1%にすぎなかった。また、最近急速に増えてきた重要な地域問題をめぐっての住民投票を行うことに関しても、56.2%が「非常に良いことだと思う」と答え、28.6%が「どちらかといえば良いことだと思う」と答えている。明らかに今信頼を失っているのは、議員たちの代議員としての正統性である。もっと直接民主制的制度を導入しなければ、ますます政治に対する関心は遠のいて行くことだろう。

支持政党に関する質問からも、政党そのものに対する不信感とそこから生まれた政治に対する無関心が読み取れる。今や、学生たちに単純に支持政党を尋ねると、8割以上の学生がないと答える。しいてどこか選んで下さいと言っても、44%もの人がそれでもないとしか答えられない。もちろん、支持政党がないという人の中には、政治的関心は高いが、政党には全く期待できないという立場の人もあるが、今回の調査でしいて言っても支持政党がないという人のうち62.0%もの人が嫌いな政党もないと答えていることから、やはりこの層の多数派は「政治的無関心層」になっていると言わざるをえないだろう¹⁵⁾。

6. 支持政党と政治的意見

社会関心が低下しているだけで終わりにせず、弱い関心なりに政治的な争点となっているような問題にどのような意見や考え方をもっているのかを次に見ていこう。上で指摘したように「なし」が多数派になってしまったが、まずは支持政党から見てみよう。

単純に支持政党を尋ねた場合、自民党の8.7%が最高で、以下3.8%の共産党、2.3%の新進党と民主党となる。あまりに数が少なすぎるので、しいてあげてもらった支持できそうな政党と合わせて見ていくことにする。もっとも支持が高いのは、もちろん自民党で22.8%である。次いで、共産党が9.9%、民主党が8.3%、新進党が6.0%、社民党が4.1%、である。この支持政党に関する質問は過去3回同じ形で繰り返してきており、本来なら時系列比較が分析の中心になるはずなのだが、そうできない。それは、最近の政党の離合集散のスピードが急速で、あっという間に新党ができ、そしてすぐに解体していくためである¹⁶⁾。今回の調査票にあげられた政党で10年前にも存在したのは、自民党と共産党だけである。とりあえず、この両党の支持率の

15) 87年調査ではこの割合は53.1%、92年調査では33.5%だった。

16) ちなみに、調査終了後2ヶ月も経たないうちに、「新進党」と「太陽党」は存在しなくなった。

変化を見ておくと、自民党は3回の調査で最低の支持率となり(28.7%→30.6%→22.8%)、共産党は最高の支持率となった(8.0%→5.8%→9.9%)。自民党は、党自体としては継続しているが、分裂、脱党、復党、理念なき連合といった形で、節操なき政治家たちの政党というイメージは、他の新党と同様に与えている。しかし、他党があまりに信頼がおけないので、とりあえず自民党に頼るしかないという形で、なんとか2割強の支持率を保っているというところだろう。他方、共産党は、この10年の間——特に最近5年間——もっともふらふらせずに、一貫した政策を掲げてきたということが、他党との比較の中で評価され、支持率をあげたと言える。しかし、今回の調査で共産党を支持すると答えた人の中で、「国が経済を統制するので、大金持ちにはなれないが最低限の生活は確実に保障されている社会」が理想だと答えた人は、わずか16.7%しかない。やはり、共産党の掲げる政策は大衆的支持を得られるものではなく、今後さらに支持率が大きく伸びるとは予想しがたい。

支持率が高く、嫌いな政党として名指しされることが少ない政党は、消去法的選択で票を集める可能性が高い。87年調査の際には、社会党がまさにその例だった。弱い支持まで含めた支持率が23.7%もあったのに対し、嫌悪率は8.5%しかなかった。そして、予想通り89年の参議院選挙で大勝し、自民党より多くの議席を獲得した。92年調査の際には、できたばかりの日本新党が小規模ながらその位置にあり(支持率:8.6%, 嫌悪率:6.0%), 93年総選挙の台風の目となり、非自民政権誕生のキャスティングボードを握った。ただ、嫌悪率は低かったが、87年調査の社会党のような高い支持率ではなかったため、自民党に拮抗するような議席を持つことはなかった。今回の調査で同じような位置に来るのは、民主党である(支持率:8.3%, 嫌悪率:7.4%)。しかし、支持率と嫌悪率の差は、92年調査の日本新党よりも小さくなっており、大きな期待はできないだろう。先にも述べた通り、支持政党なしの割合が増えるだけでなく、嫌いな政党もないと答える政治的無関心層が増えているので、すでに現実の選挙で現れているように、低投票率の下で、組織票を確実に動かせる政党が有利に戦いを進めることになる。逆に言えば、無党派層に期待して議席を伸ばしたいと考えている政党にとっては厳しい状況になっていると言える。

支持する政党別に政治的意見はどの程度異なるのであろうか。政治的な争点となっている——あるいは、かつてなっていた——住民投票、首相公選、経済発展、原発、自衛隊、天皇制問題などについて見てみよう。その際に、支持者が10人以下しかいなかった新党さきがけと太陽党、そしてその他の政党を支持すると答えた人ははぶくとともに、支持政党がないと答えた人に関しては、嫌いな政党がひとつでもあれば、「政治関心のある無党派」として捉え、嫌いな政党がひとつもないと答えている場合は、「政治関心のない無党派」と分けて捉えることにする【表8参照】。

まず、住民投票に関しては、総じて肯定的に受け止められているが、「政治関心のない無党派」層では、「非常によい」と答える人が48.6%、「どちらかといえばよい」を合わせても79.3%に

表8 支持政党別政治的意見

(支持政党) (支持者数)	自民党 (179人)	新進党 (47人)	民主党 (65人)	社民党 (32人)	共産党 (78人)	有関心 無党派 (131人)	無関心 無党派 (212人)
(住民投票)							
1. 非常によい	54.2	63.8	61.5	65.6	65.4	58.0	48.6
2. どちらかといえばよい	30.7	21.3	30.8	18.8	21.8	34.4	30.7
3. 一概には言えない	11.7	12.8	7.7	12.5	12.8	4.6	20.3
4. どちらかといえばよくない	1.7	2.1	0.0	0.0	0.0	0.8	0.5
5. 非常によくない	1.7	0.0	0.0	3.1	0.0	2.3	0.0
(首相公選)							
1. 賛成	50.6	66.0	64.6	65.6	62.8	68.9	50.5
2. どちらとも言えない	37.6	29.8	32.3	28.1	24.4	26.5	44.9
3. 反対	11.8	4.3	3.1	6.3	12.8	4.5	4.7
(経済発展)							
1. もっと発展すべき	49.4	44.7	39.1	37.5	37.2	40.5	35.7
2. そうは思わない	50.6	55.3	60.9	62.5	62.8	59.5	64.3
(原子力発電所)							
1. もっと増やすべき	10.6	4.3	6.2	3.1	7.7	5.4	5.6
2. 現状維持	52.5	76.6	50.8	50.0	35.9	47.7	56.8
3. もっと減らすべき	23.5	19.1	23.1	28.1	17.9	25.4	23.0
4. 早くなくすべき	13.4	0.0	20.0	18.8	38.5	21.5	14.6
(自衛隊の今後)							
1. 増強すべき	16.8	6.4	10.8	0.0	6.4	5.3	7.5
2. 現状維持	60.3	70.2	50.8	34.4	33.3	46.2	53.5
3. 縮小すべき	15.6	19.1	27.7	43.8	35.9	34.8	26.3
4. なくすべき	7.3	4.3	10.8	21.9	24.4	13.6	12.7
(自衛隊は合憲か)							
1. 合憲	50.0	38.3	28.1	25.0	23.1	23.5	29.6
2. どちらとも言えない	30.9	48.9	37.5	34.4	24.4	40.9	51.6
3. 違憲	19.1	12.8	34.4	40.6	52.6	35.6	18.8
(天皇制)							
1. 強化する	1.7	0.0	1.6	0.0	0.0	0.0	0.5
2. 今のまま	76.4	74.5	65.6	50.0	55.1	65.6	72.4
3. 無くす	21.9	25.5	32.8	50.0	44.9	34.4	27.1

留まる。この層は、首相公選制度に関しても、「賛成」と答える人の割合がもっとも少ない(50.5%)。どちらの問いに関しても、この層は、「一概に言えない」とか「どちらとも言えない」といった判断保留型選択肢を選ぶ割合がもっとも高い。他方、「政治関心のある無党派」は、首相公選制度に賛成する割合がもっとも高く、同じ無党派層の中での違いをよく示していると言えよう。他には、自民党支持層も、住民投票は「非常によい」と答える人が54.2%で、首相公選制度に賛成が50.6%と、こうした直接民主制的なやり方に対しては、単純に「賛成」と答える割合がやや少ないことが目につく。

日本のさらなる経済発展を望む者が相対的に多いのは、自民党支持者層（49.4%）と新進党支持者層（44.7%）である。この2つの政党の支持者たちは、原発問題でも、「現状維持」か「もっと増やすべき」という選択肢を選ぶ割合が高く（自民党支持者層：63.1%，新進党支持者層：80.9%）、経済発展志向型と言えよう。これに対し、共産党支持者は、経済発展にも原発にも否定的である（経済発展を望む者の割合：37.2%，原発の現状維持か増設を支持する者の割合：43.6%）。社民党支持者と民主党支持者と「政治関心のある無党派」がその中間に位置する。「政治関心のない無党派」層は、原発の現状維持か増設を望む人の割合は、自民党支持者に次いで多い（62.4%）のだが、これ以上の経済発展を望むという人はもっとも少ない（35.7%）。この層の多くは、あくまでも現状が変わらないことだけを考えているのだろう。

自衛隊に関しては、共産党と社民党が否定的で、自民党、新進党が肯定的である。民主党はちょうど中間的な位置にあり、「政治関心のある無党派」層は、民主党よりはやや否定的な方に近い。天皇制に関する意見もほぼ同じような並び方になっている。「政治関心のない無党派」層は、こうした問題でもやはり判断保留・現状維持型選択肢を選び、結果的に保守的な意見に近くなっている。

総合的に見て、各層の政治的考え方を表すなら以下のようなようになろう。現在の体制をもっとも批判的に捉え、現状の政治制度の中であきらめずに少しでも変えていこうとする志向性をもっとも強いのは、共産党を支持する人々である。ただし、彼らの多くは、社会主義社会を理想としてはおらず、純粋な共産党支持者というよりは、現在の諸政党の中では消去法で共産党を選ばざるをえなかった健全な批判精神の持ち主たちと言えよう。社民党支持者もほぼ似たような人々だが、各種選挙への投票意欲が共産党支持者よりやや低くなっており、現在の政治制度に対する懐疑心が強まっている点が異なる。しかし、自分たちの政治行動が直接的に結果につながると考えられる場合には、共産党支持者以上に積極的に行動しようという考え方を持つ人々である。この現状の政治制度に対する懐疑心をさらに強めた人々が、「政治関心のある無党派」層である。政治的意見としては、共産党支持者や社民党支持者に次いで批判的考え方を持つが、現状の選挙への投票意欲などはかなり減退している。しかし、首相公選制度の導入に関しては、賛成だという者がもっとも多いことや、徴兵制が導入されそうになったら、その反対運動に参加すると言う人もかなり多いことなどを考慮すると、政治制度が改善され、もっと政治的な有効性感覚が持てるようになれば、政治に関わることも厭わない層であると言えよう。これに対して、「政治関心のない無党派」層は、意欲も批判精神も弱い層である。現状の選挙ばかりでなく、住民投票も首相公選も、徴兵制反対運動にももっとも消極的な層である。政治的争点に関しても関心がないので判断保留し、結果的に現状維持に一役買う存在となっている。保守的立場が明確なのは、自民党と新進党の支持者である。様々な政治的争点に関して現体制に対する肯定的意識がかいま見える。両者の差はあまりはっきりしないが、住民投票や首相公選制度の導入に新進党支持者の方がやや肯定的であることから考えると、現在の政治制度に対する信頼

度が多少違うかもしれない。しかし、その他の価値観でもあまり差はないので、本来自民党支持でも構わなかった人が、なんとなく自民党支持とするのに抵抗感を感じて新進党支持にしたという程度の差なのかもしれない。民主党支持者は、総合的に見ると、まさに中道的位置に来るようだ。共産党支持者や社民党支持者ほどには体制批判的ではないが、自民党支持者や新進党支持者ほど保守的ではない。投票意欲や政治的参加意欲はかなりある中道的意見の持ち主と言えよう。

最後に、支持政党別ではなく、全体としての政治的意見の有りようと変化を見ておこう。今の世の中は権力をもった少数の人によって動かされていると思う人は、過半数を超える55.5%いるが、そうは思わないという人も12.1%おり、過去3回の調査では最高の割合になった。これは、最近の政界の混乱で、かつてのような自民党派閥のホスによる政治という印象が薄められたことによるものだろう。理想とする社会では相変わらず圧倒的に強いのが、「能力のある人は金持ちになれるが、国がその人たちから高い税金をとって暮らしに困る人の面倒をみる社会」(福祉社会)である。10年前の61.5%から5年前の63.2%、そして今回の61.8%とほとんど大きな変化はない。さらなる経済的發展を望む人も前回は41.5%、今回は41.1%でほとんど変化はない。核武装に反対する人は常に9割前後おり、天皇制を今のままでいいという人がやはり7割前後で一貫している。こうした中で今回かなり変化が見られたのが、自衛隊に対する意識である。前2回とも自衛隊を合憲とする人より違憲とする人がかなり多かったのに、今回は合憲とする人の方が初めて多くなった。また、2割以上いた「自衛隊をなくすべきだ」という考え方の人が12.3%に、1/3前後いた「縮小すべきだ」という考え方の人も1/4強に減った。代わって、「現状維持」が初めて過半数を超え、「増強すべき」という考え方すら4%台から9%に上昇した。こうした自衛隊に対する肯定的見方が増加した背景には、この5年間の間に生じたもっとも印象の強い出来事である「阪神・淡路大震災」と「オウム事件」がある。この2つの出来事に関連して、我々は自衛隊が救助活動などで活躍する場面をテレビを通して繰り返し見てきた。この印象が自衛隊に対する肯定的見方を増加させたと考えられる。「近い将来、核兵器を使った戦争が起こる」と予想する人はソビエト連邦がまだ存在していた10年前に比べ大きく減ったし(56.0%→44.6%→42.4%)、「近い将来日本が戦争に巻き込まれる危険がある」と考える人も増えてはいない(70.0%→65.3%→67.2%)。にもかかわらず、自衛隊を肯定する人が増えているのは、もはや若者たちにとって、自衛隊は軍隊というより「災害救助隊」として重要な存在であると位置づけられていることの表れと見るのがもっとも妥当であろう。

7. ボランティア志向

「阪神・淡路大震災」は自衛隊のイメージも変えたが、もうひとつ若者のイメージも変えたと言われる。それは、これまでわがままで自分のことしか考えない存在と思われてきた若者た

ちが率先して「ボランティア」を行ったことによるものだった。若者たちは決して個人主義ではなく、ボランティア志向が強いと言われるようになってきたのだった。以前から「個同保楽主義」を若者の主要な価値観として提起してきた私にとって、この事態はどう捉えられるべきなのか、嫌でも関心を持たざるをえなかった。そこで、今回の調査をするにあたってのひとつのポイントとして、この若者のボランティア志向の実態を把握することにした。本節では、これについて分析してみよう。

まず、実際にどのくらいの人が阪神・淡路大震災の際にボランティアをしたのかを尋ねたところ、63人で全体の8.3%という結果を得た。すでに、調査の時点から2年半以上前の出来事であり、3回生以下の学生たちは地震が起こった当時は、浪人が高校生というあまり時間的に余裕のない時期に当たっていたため、一概に低い数字とも言えないだろう。実際、ボランティア経験率は当時すでに大学生になっていた4回生が19.5%と飛び抜けて多く、受験を目の前にしていた3回生が3.6%ともっとも少ない。大学別では、神戸女学院大学が14.8%、関西学院大学が12.2%と、やはり被害のひどかった地域にある大学の学生のボランティア経験率が高い。ボランティアを経験した人の感想は様々である。中には、「やってよかった」、「喜んでくれる顔が嬉しかった」といった単純に肯定的感想を述べてくれた人はいたが、そういう人は必ずしも多くはない。肯定的感想を述べつつも、ボランティアの問題点にも触れている人が少なくない。いくつか紹介しておこう。

「困っている人を助けるのはいいことだが、助けてばかりではいけない。あのような場合は、自立の助けというふうなボランティアをすべきだ。」（1回生・男子）

「ひとつひとつに感謝して下さる人、態度の悪い人などいろいろな人がいることが印象的でした。」（3回生・女子）

「案外、ボランティアは気軽にできるものと思った。時間と金は要る。」（3回生・女子）

「ボランティアのできることは限られている。」（4回生・女子）

「登録しただけで何もさせてもらえなかった。」（4回生・女子）

「あまり人の役に立っているという気はしなかった。」（2回生・女子）

「して後悔したことは無かった。しかし、満足感や充実感があつたわけではない。」（1回生・男子）

「最初は、“結果”というものが目に見えてこないのとまどいしましたが、何かボランティアをした後に、お年寄りの方が“また来てほしい”と言って笑顔を見せられた時に、これが“結果”なんだと感じた。その笑顔にボランティアすることの意味を見出した気がした。」（2回生・女子）

最後の感想はだいぶ長く引用したが、この感想に、ボランティアに参加する若者たちが漠然

と求めているものが端的に表れている。肯定的感想をもった人の大多数がこうした言葉と笑顔に出会ったのだろう。「また来てほしい」という言葉は、自分が誰かにとって必要とされていることを明確な形で確認させてくれる。たくさん友人を作って、その人間関係の中で自らの存在を目に見える形で確認したいと考える若者たちにとって、こうした”結果”が得られるなら、ボランティアも悪くはないということになる。少なくとも、行為の結果が目に見えてこない投票行動よりは、積極的に関与する価値があると捉える者も少なくないだろう。阪神・淡路大震災の際のボランティア経験は8.3%だったが、今後また災害などが起これば、その救援のためのボランティア活動をしたいという人は46.1%もおり、「したくない」と言う人の割合(11.8%)を大きく引き離している。若者たち——若者たちだけに限らないと思うが——のボランティア志向は潜在的にはかなり強くなってきていると言えよう。

しかし、気持ちはあっても本当に動くかどうかということになると、現実的な条件などから何もしないという選択肢を選んでしまう者が大多数になろう。それを端的に示すのが、1997年に起こった日本海での原油流出事故のボランティアである。調査を行った年の出来事でもあり今回の調査対象者のほとんどは当時すでに大学生になっていたわけだが、ボランティアに行ったという人は、8人(1%)しかいなかった¹⁷⁾。行かなかった理由としては、「家が遠かった」(64.0%)、「時間がなかった」(40.7%)、「ツテがなかった」(38.9%)、「なんとなく行きそびれてしまった」(23.0%)などがあげられている。「無意味だと思った」という理由を選んだ人は、わずか3.9%しかいないことを考慮するならば、若者たちはボランティアの必要性を感じつつも、「遠い」、「忙しい」といった現実的条件から参加を見合わせたということだろう¹⁸⁾。

次に、どのような学生がボランティア志向が強いのか見てみよう。今後災害が起こったときにボランティア活動をしたいかどうかという意味と他の様々な変数との間に有意な関連が見られる。女子学生の方がボランティア志向がかなり強い(「ぜひしたい」人+「ややしたい」人の割合は、男子が33.0%に対し、女子は57.0%)ので、他の項目は男女別に分けて関連を見る必要がある。そうした形で分析して、男女ともに関連が見られるのは、以下のような項目である。若い頃の苦勞は買ってでもした方がいいと思う人、働かないでも暮らしていけるとしても遊んで暮らしたいとは思わない人、努力すれば能力は向上すると思っている人、金品の伴う性的交渉に否定的な人、自分らしい生き方をつかんでいる人、母親との会話が多い人などが、ボランティア志向が強い。また、戦争に否定的な人、政治的な参加意欲が強い人もボランティア志向

17) 確かに阪神・淡路大震災の際のボランティアに比べると小さな数字だが、関西地区の全学生の1%が、日本海側まで向いてボランティア活動に参加したと考えれば、これは非常に大きな数字だと考えることもできる。

18) ちなみに、阪神・淡路大震災の際にボランティアをしなかった理由も、同じ順番で出ている。ただし、「家が遠かった」(45.8%)という選択肢を選ぶ者は関西地区の出来事ということもあり、原油流出事故の場合よりも少なく、逆に「なんとなく行きそびれてしまった」(31.9%)という理由をあげる人は多い。また、「自分自身も被災者でボランティアどころではなかった」という人が多いのも、特徴である。

が強い。以上のような項目との関連から、まじめで積極的であり、親との関係も良好である人ほどボランティア志向が強いと言えるだろう。

豊かな社会の中で生活の苦労を経験せず、親の愛情をたっぷり受けて育った学生たちは、ボランティアをすることで、はじめて自分が必要とされる人間であることを実感して充実感を得るのかもしれない。若者たちにとってのボランティアは、それを必要とする人のために行うというよりは、自分自身のために行っているという側面が強いのではないだろうか。阪神・淡路大震災の際にボランティアをした63人のうち、半数近い27人はたった1日だけの参加だったし、福祉ボランティアの希望者が災害ボランティアの希望者より少ないのも、ボランティアを継続的に行うというより、1度経験としてやってみたいと考えている人が多いことのひとつの表れと見ることもできるのではないだろうか。情報雑誌に「友達募集」と載せたり、手帳いっばいにプリクラを貼ることに、ボランティアをちょっと経験してみることとは、表面的な表れ方は非常に異なっているが、人間関係の中で自分の存在の必要性を確認したいという欲求がともに潜在的にあるように思われてならない。そのように捉えるなら、若者の中でボランティア志向——厳密に言うと、ちょっとボランティアを経験してみたいという好奇心——が強くなっていることは、決して従来捉えられてきた若者像——私の場合なら「個同保楽主義」——と質的に異なるものではないと言えよう。

8. まとめ

本稿をまとめている最中に、中学生による殺傷事件が頻繁に起こった。「キレる子どもたち」というフレーズで、マス・メディアにも大きく取り上げられた。そうした事件の報道を見ながら思ったことはたくさんあるのだが、そのひとつに、とりあえず大きな問題も起こさず大学生になった若者は、やはりそれなりの成功者なのかもしれないということがある。今や、約4割の若者が大学生・短大生になっており、もはや特別なエリートといった存在ではないわけだが、それでも中学生たちと比べると、大学生たちには「せっかく大学まで入ったのだから」という守るものを持った意識がかいま見られる。さらに、私が調査対象とした大学は相対的にレベルが高いことを考慮すれば、ここで調査結果として出てきているものは、若者の中のかなり上澄み的な一部のデータに過ぎないということを認識しておかなければならないだろう。だから、例えば若者の中でボランティア志向が強まりつつあるなどという言明や、仕事と余暇によく表れていたようなバランス感覚の良さも、若者全般に当てはまることと言えないかもしれない。そうした限定的なデータであるということを認識しながら、最後にこの調査の結果を総括的にまとめておきたい。

本稿の最大の狙いは、この10年間の学生たちの価値観や意識の変化を捉えることにあったわけだが、まず大きく変化してきたものとしては、第1に、性別役割や性交渉に関する意識があ

げられる。現れ方も受け入れられ方も異なっているが、変化の根幹にあるものは、ともに伝統的なジェンダー観の弱体化であり、共通性があると言えよう。こうしたジェンダー観の変化は一時的・突発的なものではなく、1960年代以降、漸次的・安定的に変化してきたものなので、今後も確実に変化は進んでいこう。

第2に、ジェンダー関連意識ほどには劇的には変化していないが、社会関心や上昇志向が低下してきていることがあげられる。この変化の背景には、安定的な豊饒の時代に日本が入ってから久しいことがある。戦前、戦後のどん底時代まで戻らなくとも、60年代頃まではまだ物が有り余っているような時代ではなかったし、日本社会がそして個々の生活が、もっと豊かにもっと良くなっていくことを誰もが望んでいた。それは、上昇志向にも結びついてたし、社会のことに関心を持つことにも結びついてた。しかし、今の大学生のほとんどは第1次石油ショック後の70年代後半の生まれである。豊かになりすぎ、国際的にも批判されることの多くなった80年代以降の記憶しかほとんどない。そんな時代の中で育った彼らが、かつての若者ように、上昇志向も社会関心も持ちえないのは当然であろう。

第3の変化として取り上げる政治に対する意欲・関心が減退しているのも、日本の進むべき方向を見いだせないという意味では、同様な原因が背景にあるものとして考えられるが、これに関しては最近5年間に起こった政界の節操無き混乱が短期的要因として拍車をかけたことも指摘しておかなければならないだろう。逆に言えば、政治状況が変われば、政治に対する関心は多少戻ってくる可能性を残していると言えよう。

第4に、自衛隊に対する肯定的見方が増えたことも意識の変化としてあげられる。これは、先に述べたように、「阪神・淡路大震災」や「オウム事件」といった突発的な出来事で「災害救助隊」としての印象が強まったことの影響という側面が強く、短期的でまだ安定していない変化である。しかし考えてみると、日本の自衛隊は、1952年に「保安隊」として創設されて以来一度も戦闘に参加したことはなく、もともとこうした「災害救助隊」としてもっぱらその役割を果たしてきたとも言える。それゆえ、「阪神・淡路大震災」や「オウム事件」は確かに突発的な出来事ではあったが、それによって自衛隊の任務自体が変わったわけではなく、変わったのは、人々の受け止め方である。以前も同じような仕事をしてたにもかかわらず、かつてはそれでも自衛隊に拒否反応を示す人が多かったのに、今回はそうではなくなったのには、やはり理由はあるだろう。ひとつは、ソビエト連邦の崩壊による東西冷戦の終結、そしてもうひとつは、「自衛隊違憲」を唱え続けてきた一大勢力であった社会党の政策転換があげられるだろう。そう考えると、自衛隊に対する見方の変化も単純に短期的な変化とは言えないかもしれない。

もうひとつ、多少躊躇しながら思いがけない変化として指摘しておきたいのは、大学別の学生の意識差が縮小していることだ。10年前には、大阪大学の学生たちがいかにも「一流大学」の学生らしく、社会関心が高く、体制批判的といった意識を示していたのだが、今回の調査結

果を見ると、ほとんど他の共学大学と差がなくなっている。伝統的性別分業に批判的な人が女子学生にやや多いこと、国政選挙に対する投票意欲が多少高いこと、自衛隊を違憲とする人が多いことなどが異なるぐらいで、87年調査のようにほとんどすべての面で他大学との違いを示すような結果にはならなかった。前に指摘したように「偏差値教育」のひずみということも考えられなくはないが、たぶんそれ以上に大きいのは、93～94年の非自民政権の失敗であろう。かつて体制批判的というのは、自民党批判とイコールだった。そして、自民党から政権さえ奪えば、何か改善されると漠然と信じられていた。しかし、現実には非自民政権が生まれ、それが惨憺たる結果をもたらしたことにより、体制批判的志向は向かうべきところを失ってしまった。こうした時代状況の中で、いわゆる一流大学の学生と言えども、社会や政治に対する関心と方向性を見失いつつあるとしても仕方がないことなのかもしれない。

次に、この10年間あまり変化がなかった部分をまとめておこう。社会に関しては、現在の天皇制を維持し、核武装などはせずに、福祉の行き届いた社会を理想とするという考え方がほとんど変化なく支持されている。個人の生活や価値観では、家族や友人との人間関係が大切で、他人との協調性を大事にする。人生観では闘争志向より調和志向、好む上司のタイプはビジネスライクなタイプよりも親分肌のタイプの方が一貫して好まれている。親とのコミュニケーション頻度や親から子に伝えられている教訓などにも大きな変化はなかった。このように見ると、10年前に提示した「個同保楽主義」という価値観が、ほとんど修正を迫られないものということが理解されるだろう。

最後に、今回の調査で新たに導入した質問から得られたものをまとめておこう。「転職志向」、「直接民主制的投票」、「性の商品化」、「傷つきたくない・傷つけない症候群」、「自分探し」、「ボランティア志向」などが、今回新たに導入したテーマであったが、この中で特に注目したいのが、「直接民主制的投票」と「ボランティア志向」である。どちらもそれなりに積極的に受け止められているが、この両者に共通するものはなんだろうか。それは、自分の行動の結果がわかりやすい——できることなら文字通り目に見える——形で表れるかどうかではないだろうか。当选したら勝手な行動をする議員を選ぶ選挙にはあまり行く気はないが、身近な地域のたったひとりのトップである市長の選挙なら多少は投票しようという気になるし、さらに地域の重要な問題の諾否を直接決められる住民投票や、一国の首相を直接決められる選挙なら一段と投票意欲が増すのは、まさに自分の投じた一票の結果がわかりやすい形で見えるからであろう。また、ボランティアも自分のしたことが、相手に感謝されたり、笑顔で対応されたりするという形で直接的に返ってくる仕事であるため、やりがいを感じられるだろうという思いが背景にあって、やってみたいという人がかなりいるのであろう。逆に、一般的な仕事は、その仕事の結果がわかりやすい形で見えにくいいため、やりがいや充実感は得られないだろうと予想し、仕事を頑張ってもやりたくないという意識は少なくなっているであろう。

自分のしたことの結果をわかりやすい形で得たいというのは、若者に限らず誰でも持つもの

であろう。ただ上の世代にはその結果は必ずしも目に見える形でなくとも、想像力を働かせて、自分の仕事がどのような連関の中に組み込まれており、どういう役割を果たしているかを頭で理解することで納得できる人が少なくない。しかし、映像世代の申し子である現代の若者たちは、非常にわかりやすい目に見える形で現れた場合のみ、はじめて理解ができるという人が多い。頭の中で、抽象的な因果連関を構築することは不得意な人が多い。それが、仕事や議員を選ぶ選挙よりも、ボランティアや直接民主制的選挙を好む志向性の根底にあるものと言えよう。

この節のはじめに述べたように、この調査の対象となっている大学生は、若者層の一部にすぎない。ただ、この一部がその他の若者層と全くかけ離れたところに位置する存在だとは思えない。ちょうど氷山の一角が見えているようなもので、水面下の形はどうなっているかはわからないが、すくなくとも連続した全体の一部であることだけは間違いないと思う。確かに、いくつかは表面に出ているがゆえに、水面下の部分とは異なる性質を持ってしまっているものもあるだろうが、大部分はここに現れたものと同じかより程度が進んだものとして存在しているだろうと確信している。実際、ナイフを振り回す大学生はあまりいないが、「キレた」という言葉は、大学生の会話の中にも頻繁に登場してきている。決して大学生たちは若者の中の特別な存在ではないというのが、10年間調査をしてきた感想である。

現代学生気質 (片桐)

現代学生の意識と価値観 (単純集計)

1997年10月

<大学>		<学部>		<学年>	
桃山学院大学	162(20.6)	社会学部	528(67.2)	1回生	218(27.7)
関西大学	270(34.4)	経済・経営・商学部	19(2.4)	2回生	311(39.6)
関西学院大学	156(19.8)	人間科学部	63(8.0)	3回生	170(21.6)
大阪大学	83(10.6)	法学部	8(1.0)	4回生	87(11.1)
神戸女学院大学	54(6.9)	文学部	98(12.5)		
短期大学	61(7.7)	家政学部	25(3.2)		
		教育学部	1(0.1)		
		理・工学部	14(1.8)		
		DK. NA.	30(73.2)		

<年齢>					
18歳	78(9.9)	19歳	215(27.4)	20歳	228(29.0)
21歳	156(19.8)	22歳	76(9.7)	23歳	27(3.4)
24歳	6(0.8)				

<性別> 男性 353(44.9) 女性 433(55.1)

Q 1 現在あなたはどこから通学していますか。

1. 自宅 486(82.1) 2. 下宿 296(37.7) 3. その他 2(0.3)

Q 2 あなたは大学の授業によく出席しますか。

1. よく出席する 374(47.6) 2. まあまあ出席する 328(41.7)
3. あまり出席しない 69(8.8) 4. ほとんど出席しない 15(1.9)

Q 3 大学への入学目的は何ですか。あてはまるものすべてに○をして下さい。

1. 学びたいことがあったから 453(57.7)
2. 就職を有利にするため 295(37.6)
3. 友人を作るため 290(36.9)
4. 遊びたかったから 256(32.6)
5. 大卒の肩書きが欲しかったから 307(39.1)
6. 教員免許等の資格が欲しかったから 97(12.4)
7. 社会に出る前にもう少し時間が欲しかったから 534(68.0)
8. その他 53(6.8)

Q 4 親子関係についてお伺いします。まず、あなたは、おとうさんとよく話をしますか。

1. よく話す 213(27.1) 2. 時々話す 290(36.9)
3. たまにしか話さない 152(19.3) 4. ほとんど話さない 107(13.6)
5. 父親はいない 24(3.1)

Q 5 では、おかあさんとはどうですか。

1. よく話す 507(64.5) 2. 時々話す 203(25.8)
3. たまにしか話さない 52(6.6) 4. ほとんど話さない 18(2.3)
5. 母親はいない 6(0.8)

- Q21 結婚についてどのようにお考えですか。あなたのお考えにもっとも近いものを選んで下さい。
- | | | | |
|---------------------------|-----------|--|--|
| 1. いずれは必ず結婚したい。 | 462(58.8) | | |
| 2. 適当な相手がいなければ、結婚しなくてもよい。 | 282(35.9) | | |
| 3. 結婚はしたくない。 | 42(5.3) | | |
- Q22 結婚していない若い人たちの男女関係について、どのようにお考えですか。あなたのお考えにもっとも近いものを選んで下さい。
- | | | | |
|----------------------------------|-----------|---------|--|
| 1. 結婚式がすむまでは、性的交渉（セックス）をすべきではない。 | 27(3.4) | | |
| 2. 結婚の約束をした間柄なら、性的交渉があってもよい。 | 34(4.3) | | |
| 3. 深く愛し合っている男女なら、性的交渉があってもよい。 | 592(75.3) | | |
| 4. 性的交渉をもつのに、結婚とか愛とかは関係ない。 | 132(16.8) | | |
| DK.NA. | | 1(0.1) | |
- Q23 女性が性的交渉（セックス）の相手をして、金品を受け取ることをどう思いますか。
- | | | | |
|-------------|-----------|--------|---------|
| 1. 絶対にいけない | 253(32.2) | | |
| 2. 別にかまわない | 150(19.1) | | |
| 3. 一概には言えない | 382(48.6) | DK.NA. | 1(0.1) |
- Q24 では、女性が性的交渉を含まないデートの相手をして、金品を受け取ることをどう思いますか。
- | | | | |
|-------------|-----------|--|--|
| 1. 絶対にいけない | 183(23.3) | | |
| 2. 別にかまわない | 245(31.2) | | |
| 3. 一概には言えない | 358(45.5) | | |
- Q25 では、男性が性的交渉の相手をして、金品を受け取ることをどう思いますか。
- | | | | |
|-------------|-----------|--|--|
| 1. 絶対にいけない | 229(29.1) | | |
| 2. 別にかまわない | 195(24.8) | | |
| 3. 一概には言えない | 362(46.1) | | |
- Q26 あなたは現在の生活にどの程度満足していますか。
- | | | | |
|-------------------|-----------|--------|---------|
| 1. かなり満足している | 98(12.5) | | |
| 2. どちらかといえば満足している | 447(56.9) | | |
| 3. どちらかといえば不満だ | 202(25.7) | | |
| 4. かなり不満だ | 38(4.8) | DK.NA. | 1(0.1) |
- Q27 ここに二つの人生観があります。しいていえば、あなたの考えはどちらに近いですか。
- | | | | |
|--|-----------|---------|--|
| 1. 人生は要するに闘争だ。他人との競争に打ち勝てなければ何事もできない。 | 238(30.3) | | |
| 2. 他人と争うのはよくない。何事も丸くおさめて自然のなりゆきに従っていくのが賢いやり方だ。 | 544(69.2) | | |
| DK.NA. | | 4(0.5) | |
- Q28 人によって生活の目標もいろいろですが、以下のように分けると、あなたの生活目標にいちばん近いのはどれですか。

現代学生気質 (片桐)

- | | | |
|---------------------------|-----------|----------------|
| 1. その日その日を, 自由に楽しく過ごす。 | 235(29.9) | |
| 2. しっかりと計画をたてて, 豊かな生活を築く。 | 214(27.2) | |
| 3. 身近な人たちと, なごやかな毎日を送る。 | 290(36.9) | |
| 4. みんなと力を合わせて, 世の中をよくする。 | 44(5.6) | DK.NA. 3(0.4) |

Q29 あなたは, どのように生きたら, 自分らしく生きられるか, つかめていますか。

- | | |
|--------------------------------|-----------|
| 1. はっきりつかめている。 | 39(5.0) |
| 2. だいたいつかめている。 | 266(33.8) |
| 3. 今はつかめていないが, いずれつかめると思う。 | 301(38.3) |
| 4. 今もつかめていないし, 将来もつかめるかどうか不安だ。 | 180(22.9) |

Q30 以下にあげるようなことについて, あなたはどう思いますか。

- | | | | |
|---|-----------|-----------|---------|
| a. 将来のために, 若い頃の苦勞は買ってでもし
た方がいい。 | 521(66.3) | 265(33.7) | DK.NA. |
| b. 早く社会に出て働きたい。 | 201(25.6) | 583(74.2) | 2(0.3) |
| c. おとなになるより, 子どものままでいたい。 | 403(51.3) | 379(48.2) | 4(0.5) |
| d. 努力しても, 能力というものとはそれほど向上
するものではない。 | 194(24.7) | 592(75.3) | |
| e. 早く親から自立したい。 | 543(69.1) | 242(30.8) | 1(0.1) |
| f. もう自分はおとなだと思う。 | 161(20.5) | 624(79.4) | 1(0.1) |
| g. 転職はなるべくすべきではない。 | 255(32.4) | 527(67.0) | 4(0.5) |
| h. ある程度の収入さえ得られるなら, 出世する
より気楽な地位にいる方がいい。 | 537(68.3) | 244(31.0) | 5(0.6) |
| i. 働かないでも楽に暮していけるだけのお金が
あれば, 遊んで暮したい。 | 368(46.8) | 416(52.9) | 2(0.3) |

Q31 あなたは就職したら, 仕事と余暇のバランスをどのようにとっていきたいとお考えですか。あなたのお考えにもっとも近いものを選んで下さい。

- | | |
|------------------------------------|-----------|
| 1. 仕事よりも, 余暇に生きがいを求める。 | 43(5.5) |
| 2. 仕事はさっさとかたづけて, できるだけ余暇を楽しむようにする。 | 226(28.8) |
| 3. 仕事にも余暇にも同じぐらい力をいれる。 | 418(53.2) |
| 4. 余暇も時には楽しむが, 仕事の方に力を注ぐ。 | 87(11.1) |
| 5. 仕事に生きがい求めて, 全力を傾ける。 | 12(1.5) |

Q32 ある会社に次のような二人の課長がいるとします。もしあなたが使われるとしたら, どちらの課長がよいですか。

- | | |
|---|-----------|
| 1. 規則をまげてまで, 無理な仕事をさせることはありませんが, 仕事以外のことでは人のめんどうを見ません。 | 227(28.9) |
| 2. 時には規則をまげて, 無理な仕事をさせることもありますが, 仕事のこと以外でも人のめんどうをよく見ます。 | 557(70.9) |

DK.NA.

4(0.5)

Q33 次に, 社会関心等についてお伺いします。あなたは新聞の各記事をどの程度読みますか。下記の1, 2, 3のいずれかを () 内に書き入れて下さい。

〔「1. 必ず読む」を2点, 「2. 時々読む」を1点, 「3. ほとんど読まない」を0点として計算した得点〕

- | | | |
|------------------|----------------|------------------|
| a. 政治・外交面 (0.71) | b. 社会記事(1.13) | c. 社説 (0.67) |
| d. 家庭婦人欄 (0.57) | e. 小説 (0.19) | f. スポーツ記事(1.09) |
| g. 投書 (0.83) | h. 地方版 (0.87) | i. ラジオ欄 (0.60) |
| j. テレビ欄 (1.79) | k. 経済面 (0.47) | l. マンガ (0.93) |

Q34 以下にあげる1996年のニュースにあなたはどの程度関心を持ちましたか。

〔「1. おおいに関心を持った」を3点, 「2. やや関心を持った」を2点, 「3. あまり関心を持たなかった」を1点, 「4. 全く関心を持たなかった」を0点として計算した得点〕

- | | |
|--------------------------|----------------------------|
| a. クリントン大統領再選 (0.90) | b. 渥美清死去 (1.29) |
| c. 2002年W杯日韓国開催決定(1.57) | d. O-157大量感染 (2.42) |
| e. 北海道のトンネルで落盤事故(2.02) | f. 援助交際が話題 (1.88) |
| g. 厚生官僚の汚職事件 (1.48) | h. フランス核実験終結宣言 (1.61) |
| i. 住専処理問題 (1.32) | j. エアマックス人気 (1.40) |
| k. 薬害エイズ問題 (2.19) | l. ストーカーが話題 (2.08) |
| m. オウム裁判 (2.24) | n. 小選挙区比例代表並立制での初選挙(0.91) |
| o. 伊達公子引退 (1.26) | p. 沖縄問題 (1.64) |
| q. 携帯電話が急速に普及 (1.66) | r. アトランタ・オリンピック (1.97) |
| s. 英皇太子夫妻が離婚 (1.69) | |

Q35 あなたは、保存や発色のために食品に加えられている添加物が気になる方ですか。

- | | |
|------------------------|----------------------|
| 1. 非常に気になる 133(16.9) | 2. やや気になる 423(53.8) |
| 3. あまり気にならない 175(22.3) | 4. 全く気にならない 54(6.9) |
| DK.NA. 1(0.1) | |

Q36 原子力発電所について、あなたの考えは以下のどれに近いですか。

- | | |
|-----------------------|----------------------------|
| 1. もっと増やすべき 53(6.7) | 2. 現状を維持していくのがよい 408(51.9) |
| 3. もっと減らすべき 181(23.0) | 4. なるべく早くなくすべき 140(17.8) |
| DK.NA. 4(0.5) | |

Q37 1995年1月の阪神・淡路大震災の際に、被災された人たちのボランティアをしましたか。

- | | |
|----------------|------------------|
| 1. はい 63(8.0) | 2. いいえ 722(91.9) |
| ↳ (S Q37-1へ) | ↳ (S Q37-3へ) |

S Q37-1 どの程度ボランティアをしましたか。

- | | | |
|-------------------|------------------|-----------------|
| 1. 1日だけ 27(3.4) | 2. 2～4日 15(1.9) | 3. 5～9日 8(1.0) |
| 4. 10日以上 12(1.5) | DK.NA. 2(0.3) | 非該当 722(91.9) |

S Q37-2 ボランティアをして、どのような感想を持ちましたか。

[回答省略]

現代学生気質 (片桐)

S Q37-3 ボランティアをしなかったのはなぜですか。あてはまる理由のすべてに○をしてください。

- | | |
|-------------------------|-----------|
| 1. 興味がなかった。 | 103(14.3) |
| 2. ボランティアをしても、無意味だと思った。 | 17(2.4) |
| 3. ボランティアを行うツテがなかった。 | 294(40.8) |
| 4. 家が遠かった。 | 330(45.8) |
| 5. 忙しくて時間がなかった。 | 298(41.3) |
| 6. 経済的な余裕がなかった。 | 82(11.4) |
| 7. 家族など周りの人に反対された。 | 10(1.4) |
| 8. なんとなく行きそびれてしまった。 | 230(31.9) |
| 9. その他 | 73(10.1) |

Q38 今年起こった日本海での原油流出事故で、原油回収のボランティアをしましたか。

- | | | | |
|-------|---------|--------------|-----------|
| 1. はい | 8(1.0) | 2. いいえ | 778(99.0) |
| | | ↳ (S Q38-1へ) | |

S Q38-1 ボランティアをしなかったのは、なぜですか。あてはまる理由のすべてに○をしてください。

- | | |
|-------------------------|-----------|
| 1. 興味がなかった。 | 145(18.9) |
| 2. ボランティアをしても、無意味だと思った。 | 30(3.9) |
| 3. ボランティアを行うツテがなかった。 | 299(38.9) |
| 4. 家が遠かった。 | 492(64.0) |
| 5. 忙しくて時間がなかった。 | 313(40.7) |
| 6. 経済的な余裕がなかった。 | 116(15.1) |
| 7. 家族など周りの人に反対された。 | 11(1.4) |
| 8. なんとなく行きそびれてしまった。 | 177(23.0) |
| 9. その他 | 23(1.4) |

Q39 今後また災害などが起これば、その救援のためのボランティア活動をしたいと思いますか。

- | | | | |
|--------------|-----------|-------------|-----------|
| 1. ぜひしたい | 113(14.4) | 2. ややしたい | 249(31.7) |
| 3. 一概には言えない | 329(41.9) | 4. あまりしたくない | 62(7.9) |
| 5. まったくしたくない | 31(3.9) | DK.NA. | 2(0.3) |

Q40 障害者の手助けをする福祉ボランティア活動をしたいと思いますか。

- | | | | |
|--------------|-----------|-------------|-----------|
| 1. ぜひしたい | 95(12.1) | 2. ややしたい | 235(29.9) |
| 3. 一概には言えない | 287(36.5) | 4. あまりしたくない | 119(15.1) |
| 5. まったくしたくない | 49(6.2) | DK.NA. | 1(0.1) |

Q41 電車やバスの中で、あなたの座っている前に、高齢者の方が来られたら、あなたは席を譲りますか。

- | | | | |
|--------------|-----------|-----------|-----------|
| 1. 必ず譲る | 116(14.8) | 2. だいたい譲る | 483(61.5) |
| 3. ほとんど譲らない | 163(20.7) | 4. 全く譲らない | 20(2.5) |
| | | DK.NA. | 4(0.5) |
| ↳ (S Q41-1へ) | | | |

S Q41-1 譲らないのは、なぜですか。

1. 譲る気がない 72(9.2)
 2. うまく譲れない 87(11.1)
 3. その他 11(1.4)
 DK.NA. 15(1.9) 非該当 601(76.5)

Q42 あなたは、次にあげるとの選挙なら投票に行こうと思いますか。行こうと思うものにすべて○をして下さい。(選挙権のない方もあるものと考えて答えて下さい。)

1. 市町村長 506(64.4) 2. 市町村議会 295(37.5) 3. 都道府県知事 468(59.5)
 4. 都道府県議会 239(30.4) 5. 参議院 341(43.4) 6. 衆議院 425(54.1)

Q43 最近各地で重要な地域問題をめぐって住民投票が行われるようになってきていますが、こうした住民投票についてあなたはどのように思いますか。

1. 非常に良いことだと思う。 442(56.2)
 2. どちらかといえば、良いことだと思う。 225(28.6)
 3. 一概には言えない。 100(12.7)
 4. どちらかといえば、良くないことだと思う。 6(0.8)
 5. 非常に良くないことだと思う。 8(1.0) DK.NA. 5(0.6)

Q44 首相公選制(国民投票で総理大臣を選ぶ制度)を導入したらどうかという意見がありますが、あなたはこれについてどう思いますか。

1. 賛成 457(58.1) 2. 反対 56(7.1) 3. どちらとも言えない 271(34.5)
 DK.NA. 2(0.3)

Q45 あなたは、どの政党を支持していますか。

1. 自民党 68(8.7) 2. 新進党 18(2.3) 3. 民主党 18(2.3)
 4. 共産党 30(3.8) 5. 社民党 8(1.0) 6. 太陽党 3(0.4)
 7. さきがけ 2(0.3) 8. その他 2(0.3) 9. ない 635(80.8)
 DK.NA. 2(0.3) ↳ (SQ45-1へ)

SQ45-1 しいていえば、どの政党が支持できそうですか。

1. 自民党 111(14.1) 2. 新進党 29(3.7) 3. 民主党 47(6.0)
 4. 共産党 48(6.1) 5. 社民党 24(3.1) 6. 太陽党 4(0.5)
 7. さきがけ 8(1.0) 8. その他 3(0.4) 9. ない 346(44.0)
 DK.NA. 17(2.2) 非該当 149(19.0)

Q46 では逆に嫌いな政党はありますか。あればいくつでも○をつけて下さい。

1. 自民党 205(26.1) 2. 新進党 185(23.5) 3. 民主党 58(7.4)
 4. 共産党 188(23.9) 5. 社民党 128(16.3) 6. 太陽党 100(12.7)
 7. さきがけ 86(20.0) 8. その他 12(1.5) 9. ない 354(45.0)

Q47 今の世の中は権力をもった少数の人によって動かされているという意見がありますが、あなたはどのように思いますか。

1. そう思う 436(55.5) 2. そう思わない 95(12.1) 3. 一概には言えない 254(32.3)

現代学生気質 (片桐)

DK.NA. 1(0.1)

Q48 次にあげる社会のうちで、あなたの理想とする社会に近いのはどれですか。

- | | |
|---|-----------|
| 1. 自由に競争ができて、能力のある人はどんどん金持ちになれるが、暮らしに困る人もでる社会 | 110(14.0) |
| 2. 国が経済を統制するので、大金持ちにはなれないが最低限の生活は確実に保証されている社会 | 185(23.5) |
| 3. 能力のある人は金持ちになれるが、国がその人たちから高い税金をとって暮らしに困る人の面倒をみる社会 | 486(61.8) |
| DK.NA. | 5(0.6) |

Q49 以下にあげるようなことについて、あなたはどのように思いますか。

- | | | | |
|--|-----------|-----------|--------|
| | | そうは | |
| | そう思う | 思わない | DK.NA. |
| a. 日本はもっと経済的に発展すべきだ。 | 323(41.1) | 458(58.3) | 5(0.6) |
| b. 近い将来、核兵器を使った戦争が起こる。 | 333(42.4) | 451(57.4) | 2(0.3) |
| c. 現在の世界情勢から考えて、近い将来日本が戦争に巻き込まれる危険がある。 | 528(67.2) | 256(32.6) | 2(0.3) |
| d. いずれ日本も核武装したほうがいい。 | 81(10.3) | 703(89.4) | 2(0.3) |

Q50 戦争は絶対にいけないと思いますか。あなたのお考えにもっとも近いものを以下の中からひとつだけ選んで下さい。

- | | |
|---------------------------------|-----------|
| 1. いかなる場合でも戦争はいけない。 | 502(63.9) |
| 2. 自国を他国からの侵略から守るためにはやむをえない。 | 252(32.1) |
| 3. 他国の戦争であっても、助力の要請があれば介入してもよい。 | 17(2.2) |
| 4. 必要があれば、積極的に戦争という手段を利用してよい。 | 13(1.7) |
| DK. NA. | 2(0.3) |

Q51 日本の自衛隊をどうすべきだと思いますか。

- | | | | |
|----------|-----------|----------|-----------|
| 1. 増強すべき | 71(9.0) | 2. 現状維持 | 405(51.5) |
| 3. 縮小すべき | 211(26.8) | 4. なくすべき | 97(12.3) |
| | | DK.NA. | 2(0.3) |

Q52 自衛隊は合憲だと思いますか。

- | | |
|--------------|-----------|
| 1. 合憲である | 252(32.1) |
| 2. 違憲である | 216(27.5) |
| 3. どちらとも言えない | 313(39.8) |
| DK.NA. | 5(0.6) |

Q53 現在様々な反核・平和運動がありますが、あなたはこうした運動に参加したいと思ったことがありますか。

- | | | | | | |
|-------|-----------|-------|-----------|--------|--------|
| 1. ある | 165(21.0) | 2. ない | 620(78.9) | DK.NA. | 1(0.1) |
|-------|-----------|-------|-----------|--------|--------|

Q54 では徴兵制が実施されそうになった場合、あなたはその反対運動に参加しますか。

- | | | | | | |
|---------|-----------|----------|-----------|--------|--------|
| 1. 参加する | 516(65.6) | 2. 参加しない | 261(33.2) | DK.NA. | 9(1.1) |
|---------|-----------|----------|-----------|--------|--------|

Q55 天皇制についてどう思いますか。

- | | | | |
|-------------|-----------|------------|-----------|
| 1. 強化の方がよい | 5(0.6) | 2. 今のままがよい | 538(68.4) |
| 3. 無くした方がよい | 238(30.3) | DK.NA. | 5(0.6) |

Q56 最後に、あなたにとって、いちばん大切と思うものをひとつだけあげてください。

- | | | | |
|------------|-----------|------------|-----------|
| 1. 自分・生命 | 172(21.9) | 2. 家族・友人 | 236(30.0) |
| 3. 愛情・優しさ | 60(7.6) | 4. 信念・努力 | 50(6.4) |
| 5. 生きがい・目標 | 55(7.0) | 6. 平和・よい社会 | 54(6.9) |
| 7. 自然・環境 | 7(0.9) | 8. 時間・自由 | 24(3.1) |
| 9. 金 | 13(1.7) | 10. その他 | 29(3.7) |
| | | DK.NA. | 86(10.9) |

— 1998.5.18受稿 —